目次

更に進め我軍の戰士……本多日生
本經祖書要文講義……本多日生
佛教の大要……本多日生
遠慮なき皇道大本教の批判……記者
日蓮聖人教義綱要……井村日威
記事報道十數件

第廿五年十月號

時言

更に進め我軍の戰士

本多日生

六、分裂よりは統一へ

是は前段の排濟よりは同心へと同じような意味でありますけれども、派が分裂して進んで行くとか、新しいやうな事を言つて日蓮主義者の統一を破るのは非常に惡い事であつて、何處迄も今迄言ひ違つて居る事も直して、統一の方向に向つて進まなければならぬ。それは教育上に就ても布教上に就ても、自分自身の研究に就ても、てんでに違つた事を言つて宜いと思ふやうな事は大間違である。今日に於てもさう云ふ傾向がある、或る派は今までより違つたやうなことをえらさうに言ふ、一方が融合しやうと思ふて大人しくして居れば、「彼奴あかんから頭を下げるのだ」と云つて、この統一の機運に對して詰らない空威張をする人がある、そんなのは閻魔法王の前に於て頭をブチ割らるべき者である。此方はどうしても左樣な日蓮主義者の内訌をやつてはいかんと思ふから、成るべく歩調を一にして融合しやうとすれば、「ナニ彼奴はあかんものだから弱つて居るのだ」と云ふやうな下らん讒謗を以て信者を騙

す、實に憎むべき者であるが、それに引かゝれば内訌が起つて外の笑ひを受けるから、所謂慶頭、藺相如のやうな話で、それを忍んで默過して行かなければならぬ。所謂天下の廣居に立つて天下の大道を行ふといふことに、日蓮主義者は心懸けなければならぬ、暗愚なる者を集めてその中に空威張をするといふやうな事は、日蓮主義者の最も恥づべき所行である。であるからこの分裂は、今日に於ては徹底的に惡い事だと極めて置かなければならぬ。故に各派の學問、教育の方針でも、布教の方針でも、分裂的なる方針を取るのは間違つて居ると斷定して、もう少し日蓮主義者團體の制裁力を明らかにして行かんければならぬ。今日は研究上に於ても布教上に於ても、その宗派の制度上に於ても、日蓮主義を何等かの機會に於て統合しなければならぬ、元と一人の日蓮聖人であるから、其處に基かなければならぬと云ふ十分の見込を附けて働く人は宜いけれども、遣り居るか遣り居らぬか分らぬやうな事で、少しばかり遣りかけても又分裂しやうと云ふやうな事を、教育上、布教上、制度上に於て考へて居る者は、日蓮主義の物與を妨げる人と斷言するのであります。無論永き歴史に於て分裂して來たものであるから、さう簡單には統一は出來んけれども、少しやつて出來なければ「もうこれは駄目だ」と云つて捨てゝ仕舞ふといふのは熱心が足らぬ、教にも、少しやつて出來なければ「もうこれは駄目だ」と云つて捨てゝ仕舞ふといふのは熱心が足らぬ、教に對して忠實ならざるものである。自分一代で行かんければ後に傳へても、どうしても統一し了らんければならぬのである、啻に日蓮門下の統一ばかりではない、佛教を統一し一乘の教を立てて、一天四海をして妙法に歸せしめやうといふ大理想を奉ずる日蓮門下が、僅かな理窟で分裂して、統合をやりかけても直ぐ變心して「逆もいかん」といふやうな事では駄目ぢや。これは要するに人物が無いから出來ないのである、何も難かしい事はない、本當の人格者が出たならば、日蓮門下の統一は難作はない、それは一人ではいか

ん、その派その派に人物があつて、その代表者が出て一つの派を代表して來た以上は、後から内部で苦情を言ふなといつて之を抑へるだけの者がありさへすれば行ける。けれども代表して來る者がバイ〳〵で、他の者に理窟を言はれゝば尻込みするやうな、資格の備はらぬ代表者は幾ら出て來ても統合は出來はせぬ、自分が引受けて來た以上は、それだけの事をその團體に對して實行せしむる力がなくては駄目ぢや。ウイルソンのやうに巴里會議に於て自分は引受けたけれども、國に歸れば國民を承服せしむる事が出來ぬといふやうな事では、代表者とは言はれない。それと同じ事で、そんな者が幾ら出ても、書付を拵へて判を捺して行つたけれども、「家庭の嬶アが承知しませんから……」と言ふと同じでそんな事は兒戯に類する。であるから分裂の非なる所以を根本より明らかにして、之を繼續的に主張し宣傳すべきであります。

七、單信よりは教義へ

次には今まで日蓮主義者が、「唯だ信心しさへすれば宜い」といふ事を多く聞き達へて居る。それはさういふ御遺文もあるけれども、それは觀念、觀法といふやうな事に對して單信と說かれたので、法華經の教の意味合ひを心得なくとも宜いか否かといふ事に就ては、日蓮聖人は「法華經の教を心得なくとも宜い」とは決して仰せられぬ。「假令法華經を口に讀むとも、法華經の教に背いて居る者は謗法である」といふ、非常に日蓮聖人は謗法の事を喧ましく言はれて居るが、これは「謗」といふ字が書いてあるけれども、「そむく」といふ字である、教に背く者を皆な謗法といふのである。謗法罪は日蓮門下に於てこの位恐ろしいものはないので、世間に於て大逆罪といふやうなものである、謗法の罪は漆千斤に盤の足一本と日蓮聖人は

言はれた、漆を澤山集めても蟹の足を入れるとその漆がさつぱり利かなくなる、幾ら功德を澤山積んでも誘法の罪が一つあれば皆な無駄になつてしまふと云ふ。日蓮主義者が誘法の言葉を忘れてしまふやうな教育の仕方をしては駄目ぢやないか、そんな馬鹿な話はない、何ぼ善い事をしても漆千斤に蟹の足一本と日蓮が言つたやうに、さういふ誘法の罪に陷つてはならぬ。その誘法になるかならぬかといふ事は、法華經の教を聞かなければ分らないぢやないか、唯だ無闇にやつて行き居つたならば、やはり蟹の足を漆の中に澤山投り込むやうな事になつてしまふ。てあるから唯だ信心と言つても、法華經の教の意味合ひを心得なければならぬ。殊に今日は教育も發達して來て、相當な人は女學校、中學校に這入つて行くのてあるから、「何も知らずに信心せよ」と言つても、寧ろその受け人の方から「何も知らずには出來ません」と言ふてあらう。昔の人は「何も知らずにやれ」と云ふことを喜んて聞いたけれども、今日の人は「何も知らずにやれ」と言つても「何も知らぬ事はやれませぬ」と云ふだらう。だから單信というて唯だ意義も分らずに信心せよといふ事ばかり言つてはいかぬ、どうしても其處に教義を心得て行くことが大事てある。それは「有難い」と思ふ心は單純なものてあるけれども、この單純なる信仰の底には教義の意味合ひが了解されて進んて行かなければならないのてある。故に日蓮主義者は信解と言つて、信仰と相當の了解とを併せ持つて行かなければならぬ。是は昔の型で說教をする坊さんが、第一布教の式を斷然改めなければならぬ。「日蓮主義は一向唱題南無妙法蓮華經ぢや」と言つて、それを面倒な事を云ふのは、「彼奴は學問したから學問に囚はれたんぢや」と言つて、教義の理解ある信仰を罵るやうな人が未だ幾らも居る。私等の方はそんな事を言へば直ぐ投り出してしまふから無くなつたけれども、他の各派てはヨウ投り出しもせずに、その儘勝手放題の事を言はして、それを處分することも出來ぬ、實にだらしのないものてある。日蓮主義の團結はそんなものては無からう、正義に背いたならば相當の制裁をしなければ、教義の純正を期する事は出來まい。大體各派が教義上に於て制裁しないのは間違つて居る。ドンドン勝手な事をやつて、無茶ばかりやつて居つても、之をどうする事も出來ない。だから教義の事を罵つたりするやうな馬鹿坊主、迷信を鼓吹して教義を嘲るやうな者が殖えて來たので、第一に宗政上處分しなければならぬ。それから信者の中てもさう云ふ事を云ふ者があるならば、教義を心得た者が「お前さんさうぢやない、唯だ信心すると言つても心得が違つて居つては誘法の罪になる、お前さんは誘法といふ事さへも知らぬだらう」「知りません」「それぢや駄目ぢやないか」と云ふやうに、正確なる思想が普及して行かなければならぬ。今日は隨分無茶を言うて毒を流して行き居る坊主が一パイ居る。てあるから割合に日蓮主義が發展をしないのてある。今日は內輪が整頓して懸つたならば、日蓮主義を歡迎すべき機運に向つて居るのてある。それは澤山の人に對つて大きな講壇に立つて言ふ事は出來なくとも、布教師なり、寺の坊さんが間違つた事を言はぬやうに、又それを聽いて信者が間違つた事を言はぬやうに、日蓮主義本來の正しき信仰に活きる者が現れて來たならば、日蓮主義はドン〳〵勃興するのてある。何も難かしい事はない、正しい事をやれば宜い、それを誤魔化し見たやうな事を言つてやるからいけない、何處迄もこの教義上の神聖を維持して行かなければならぬ。

八、研究よりは信仰へ

それからその反面には又今の學生や相當な人が、日蓮主義研究會を開いて、研究を盛んにやる。それは

研究は結構であるが、何時までも研究々々で、五年經つても研究、七年經つても研究ではいかぬ。研究會は一段進んで正確なる信仰を握つて、研究より信仰に進んで行くやうにせられんければならぬ。是は私はあらゆる新らしき團體に對して警告をするのであります、何時までも研究して居つたら宜いと云ふ態度は宜しくない、それは忙がしいからでもあらうが、大體不眞面目な點があらうと思ふ。相當自分が了解して信仰しても宜いといふのに、何時までも徹底しないと云ふのは、人格上の問題である、これは甚だ遺憾に思ふ。であるから最早や日蓮主義の各種の研究團體は、その中に熱烈なる信仰を發揮しなければ、日蓮聖人に對して相濟まぬといふ事を私は忠告するのである。

九、雜信よりは純信へ

それからその次には、その信仰もどうでも宜いやうな意味でやつてはいかん、間に合せな好い加減の信仰ではいかん。何故いけないかと云ふと、今日はその研究より進んで何等かの信仰に入る位の人は、他から見てやはり日蓮主義の先輩として仰がれ、又講演の一つも頼まれるのであるから、その人はそれだけの責任ある人である、それ故に自分みづからの信仰が雜然たるものであつてはならぬと思ふ。どうぞ自らの責任を自覺せられて、人から尊敬を受け、指導者を以て目せられるやうな人は、純乎たる信念を立てゝお進みになる事が、自分の爲にも又日蓮聖人に對しても爲さらんければならぬことと思ふ。これは先づ新研究の人々に對して言ふのであるが、古い方にも是がある、迷信とか雜亂とか云ふ事がある。元來日蓮主義は正義の信仰に立つて居るものである。私は餘りに雜亂の事をきつく言ひ過ぎるやうに人は考へて居るけれども、餘り他の者が腐り過ぎて居るのである、私の言ふのはさうひどい事を云ふのぢやない。餘り低級な今日問題に成らぬやうな事を日蓮宗の人々が澤山やつて居る、それをいかんと云ふのである。例へば鬼子母神の信仰などゝ云ふことも、鬼子母神といふものは大本尊の中にもあるのであるから、御同向するも宜しいけれども、鬼子母神でなければ御利益がないといふやうになつて、お釋迦樣を忘れてしまひ、法華經を忘れて、唯鬼子母神講ナンといふものが出來て、さうしてドンドコやつて居る、或は「此方は帝釋樣だ」とか、「イヤ此方は瘡守の稻荷樣だ」とか、さういふやうな實に今日の大本教にも劣づべきやうな低級なものが雜然と存して居る。殆んど南無妙法蓮華經の太鼓の音のする所に行つて御覽なさい、正確なる信仰として紹介すべきものは殆ど無いでせう、どうしても一つ考へ直さんければいくまい。斯樣な有樣であつたならば、永遠に日蓮主義はこの思想の戰ひから振り落されて行くのであつて、今日思想が惡化しやうが、そんな事には何等の關係を持つて居りはせん、其處に分界が立つて居る。この大きな珠數を掛けて居る者が、一人として「今日はどうも容易ならぬ」といふ事を叫ぶ者は無い、唯だ鼻アの鼻が落ちかけた、これは大變だと言つてやつて居る、どうしてももう少し信仰の筋を正してかゝらんければいけないと思ふ。

十、鑽仰よりは宣傳へ

もう一つは近來日蓮主義鑽仰會とか、日蓮聖人を鑽仰すると云ふ人は段々ありますけれども、それは信仰に進み、信仰より進んで更に宣傳をやらなければならぬといふ自覺を要する、日蓮主義は元來宣傳主

てある。殊更に宣傳せよといふのではない、日蓮主義そのものが宣傳主義である。丁度日本が發展主義であるやうに、武勇といふものを除つては軍人でないが如くに、日本と言へば發展であり、日蓮主義と言へば宣傳である、宣傳無くして日蓮主義は無い、日蓮主義は唯だ個人の自分の信仰に止まるものでない、必ずや他に之を傳んとする所の教である。その事は法華經の上に見ても頗る明らかになつて居るので、未だ大事な壽量品も說かぬ中に、第十番目の法師品に於て、いきなりこの法華經を弘めるに就ての注意が示されてある、法師の心得を說いて、竊に一人の爲に一句の法を說くも如來の使ひであると言つて、法華經の宣傳を極力奬勵された。隣りのお婆さんの所に行つて「法華經は有難い教へだ」と言つてその一言を說くのは、佛樣の御名代になつて佛樣の仕事をして居る、尊い如來の使ひである、「況んや大衆の中に於て廣く說かんをや」と仰せられてある。それから第十一の寶塔品に來つては六難九易の例を擧げて、或は乾草を脊負つて大火の中に身を投ずることは出來ても、又世界を足の甲の上に乘せて飛上ることは出來ても、それは尙ほ且つ易い、後の世に法華經を說くは容易ならぬ、併し心ある者は法華經を弘める誓ひを立てなければならぬと云ふので、「法華經を弘める誓ひを立てよ、誓ひを立てよ」と繰返して三度び釋尊が仰せられた。其處で誰も皆な志を起して、この法華經を弘めやうとの誓願を起し、提婆品に至つて惡人女人の成佛が現れたのも、誰だ惡人女人の成佛を說いたのではない、如何なる惡人でも法華經に依つては成佛する、女人も救はるる、斯樣な立派な教てあるから弘める志を起せと言つて、惡人成佛、女人成佛は法華經宣傳の志を刺戟鞭撻したものである。それてあるから第十三番目の勸持品に至つて「私に」「私に」と言つて皆な誓ひを立てゝ、如何なる困難があつても、假令三類の敵人が起つて頸の坐に座するとも、流し者にならうとも宜しいから、どうぞ私に許して下さいといふ誓ひを立てた。その時に釋迦如來は、それに直ぐお答へを爲さらないて、安樂行品を說いて四つの方法に依つて法華經を困難無く弘め得る話をしたけれども、聽衆の方は熱心凝つて居るが故に、涌出品に來るといきなり又他方の菩薩が「私に」「私に」と言つて願ひ出た。その時に釋迦如來は「止ね善男子――マアお前等待て、法華經を弘めるには迫害があり反對があつて、容易な事ではない。その困難の爲にやり損うて呉れたならば、法華經の權威が地に墜ると同時に、佛法の生命が無くなる、佛法の生命が滅びれば一切衆生は闇に迷はんければならぬ、てあるからこの大事を託すべき者はお前等てはない、我れに特別の弟子がある」と言つて上行菩薩を呼び出して、愈々法華經を授けることになる。その次に壽量品を說いて居るし、それから分別功德品、神力品、屬累品に亘つて法華經を弘める事ばかり說いてある、法華經から宣傳を除つてしまつたならば、一切の幕がさつぱり分らなくなつてしまふ、二十八幕あるけれども、總べて宣傳が生命となつて居る、弘めるといふ事が法華經の全體を貫いて居るのてある。それてあるから日蓮主義者は何處までも唯だ研究てあるとか鑽仰てあるとか云ふやうな事に安んぜらるべきものてはない。又信心をするからと言つても、幾ら熱心てあるからと言つても、唯だ自分がお題目を唱へて毎日お勤行をするだけて、この教の世に弘まることを念願しないやうな者ならば、日蓮主義者てはない。それ故に昔說教の出來ない坊さんが山籠をして居つても、その願ふことは何かと云ふと、一途に廣宣流布を願ふのてある「俺は學問も足らず說教も出來ず、何を以ても盡す事が出來ないから、この一生懸命の念願を以てお經を讀み、精神を單めて、諸天善神の加護の力を得て、廣宣流布の大事を成就しやう」と言つて、廣宣流布の事を願ふ。てあるから朝夕のお勤めても、日蓮聖人の書いてある言上文、

（勤行の後に申上げる言葉であるから之を言上文といふ）、御本尊に言上する文は、「眞俗如意廣宣流布」の一事である、あとは何も無い。「眞」といふのは坊さん、「俗」とは信者であるから、坊さんも信者も、それ等が心の中に願ふ所は、唯だ一つ法華經の廣宣流布である、坊さんも信者も皆なが一生懸命に廣宣流布の事が叶ひますやうにと云ふので、廣宣流布の一願の中に萬事が成就すると云ふのである。唯今の御遺文にもあつた通り、廣宣流布する事に手傳つたから、それで自分の成佛が出來ると云ふことになる。この法の盛大になるやうに力を盡すが一番功德が多いから、それを手傳つて行けば成佛が出來る。故に守護國家論の中にも、成佛はどうして得られたかと云ふと　正法を護持する因緣を以ての故にこの金剛の身を得たりと言つて、即ち法を守つてそれを世に弘めることに手傳つたから佛に成つたといふことがある。法華の成佛は法を弘める手傳ひをすることに依つて成佛する力が一番強く其處から現れて來ると云ふのである、であるから昔から法華行者は非常に弘める事に熱心した。それは大事な點でありまして、釋迦如來が全體さう云ふ御趣旨であるから、彼の勝鬘經を御覽になつても、これは勝鬘夫人が十種の誓願を述べてそれを三種に纏めて、更に一種に纏める時に、一つ殘したるものは何かといふと、「攝受正法」と言つて、正法を守つて世に弘めると云ふ一つに纏めた、擴げれば三つ、更に擴げれば十願であるけれども、一つに結束する時には正法を守つて世に弘める、故に吾が城中七歳已上の女子には必ず大乘の佛法を信ぜしめやうといふ一つの誓願を以て、勝鬘經は貫いて居る。その正法を宣傳すると云ふことに力を盡さんければ、唯だ寺の屋根普請をする時錢を出す、疊がへする時錢を出す、御新藤して貰つたからお禮をすると云ふだけでは駄目である。其處で私の師匠は「どうも坊さんが法事や葬式で飯が食へる間は佛敎は駄目だ」と云ふので、

岡山縣に於てやつて居つたのは、法事、葬式は無料で、お布施をせぬことにする、普通には法事葬式にお經を讀んでお布施を貰ふ、「布施無き經は讀まん」ナンと云ふけれども、お經を讀むと云ふやうな事は、諳誦して覺えて「爾時世尊從三昧」と言へば、坐睡りして居つても「本末究竟等」まで行つてしまふ、別に骨の折れるものでない、ズーッと讀みさへすればそれで宜い。それだけで飯が食へると云ふことになると樣な坊主は出來ないと云ふので、法事、葬式は無料ぢや、その代り演說、說敎をする時にはちやんと報恩料を供養する、說敎、演說に對しては相當の報恩の心を盡す、それは布敎宣傳を手傳ふ所の宣傳費に寄附するといふことにして、法事、葬式は全部無料にした、私の師匠は之を實行して長くやつて居つた。私などもその後を襲いでやつたが、その風が今尙ほ岡山縣には殘つて居るから、岡山縣の敎團に於ては非常に善良な風が發達して、僧侶が布敎傳道の爲に盡力して、他の地方よりは盛んに布敎をして居る。これは非常に大事なことであります。所が東京などに於ては私共も始終各地に出て居るので、何時來ても留守のことが多い、さうすると「寺の和尙は何をして居るのか」といふやうな事を言つて、斯の如く吾々が活動して居る事だも知らぬ者が多い。唯だやはり寺に居つて、檀家が來れば「入らつしやい」と言つてお茶を出してお菓子を出せば、それが一番良い和尙だと思つて居る。斯くて活動する僧侶を助けるといふ觀念を日蓮主義者が持たぬ間は、到底思想戰に進軍する事は出來まいと思ふ。それ故にどうか日蓮主義鎭仰者は最早や宣傳の方に廻つてやつて戴きたいと考へて居るのであります。今回學生の日蓮主義宣傳會が出來まして、その際にも色々の議論がありましたが、研究は宣傳を伴はなければならぬと云ふことを、大多數承服する樣になつて、鎭仰と併せて宣傳をやるやうになつて居る、是は洵に善い事である。各地方にも日蓮鎭仰會が澤山

ありますが、是は孰れも宣傳に進んで行かなければならぬと思ひます。

十一、迎合よりは指導へ

もう一つ最後に申して置きたいのは、日蓮主義は非常に廣い教てありますから、色々の思想と能く調和する、國家主義とも合ふし、精力主義てあるとか、奮鬪主義てあるとか、樣々な現代に歡迎して居る思想と日蓮主義は合する。けれどもその合ふといふ事は此方が合せて貰ふ樣な態度て行くことは、宜くあるまいと思ふ。國家主義に合ふと言つても日蓮主義て教へる國家主義は世間て言うて居るとは少しく違ふ、日蓮主義の國家觀を手本として日蓮主義が國家主義を教へるのは宜いけれども、世間の方に國家主義の型があつて、それに日蓮主義を合せて行くと云ふ論式て行くことは、日蓮聖人の御趣旨に合はぬと思ふ。それは世間の學說の方が低いし、間違つて居る點もあるから、大抵の場合に於ては世間て言うて居るその儘に於て日蓮主義が是に合するやうな解釋をすることは、廢めなければいくまいと思ふ。日蓮主義は日蓮主義獨特の立場に於て、若し國家主義を唱へるならば、國家主義の模範を以て、日蓮主義的國家主義を發揮し、指導者の權威を有つて行きたい。過日井上哲次郎博士が「思想問題の歸結」と題して種々有益な講演がありました、私その話を聞いて非常に喜ばしく思うたのは、博士の結論が大體日蓮主義に依つてこの澎湃たる所の東西の人心の歸結が導かれると云ふにあつた。今の日本の多くの學者は西洋風の觀念に囚はれて居る者が多いのに、井上老博士は思想問題の歸結は、日本的にやらなければならぬ、日本的にやる模範は日蓮聖人てあると云ふに就て、色々日蓮主義の長所を紹介して、この思想問題の歸結を其處に導くべしと結論されたは、大きな事實てありまして、我國思想界の先達を以て任じて居る井上博士がさう云ふ風に論じられた事は、大いに喜ぶべき現象てあると思ひます。

どうか日蓮主義嶺仰の人達は、迎合の態度を改めて、井上博士が言はれるやうに、「思想問題の歸結は日蓮主義の指導に俟つ」といふやうな意味に於て、大いにこの日蓮主義の宣傳をやつて行つて、さうして日蓮主義獨特の活動を起して、我國の思想を惑亂し、國家の基礎を危うせんとして居るやうな惡思想を擊滅して、內は國家に貢獻し、上は日蓮聖人の鴻恩に酬ひて、大正の日蓮主義者は能くその活動を全ふしたものてあるといふ事を、後世の歷史に留めるやうに致したいものてあります、どうぞ諸君と共にこの大事に專念して進むことを誓ひたいのてあります。（完結）

本經祖書要文講義

本多日生

三五、一昨日御書　方今世悉く關東に歸し人皆士風を貴ぶ、就中日蓮生を此の士に得たり、豈吾國を思はざらんや、依て立正安國論を作つて故の最明寺入道の御時宿屋の入道を以て見參に入れ畢んぬ。而るに近年の間多日の程犬戎浪を亂し異敵國を伺ふ、先年勘へ申す所近日符合せしむる者なり。彼の太公の殷の國に入りしは西伯の禮に依り、張良の秦の朝を量りしは漢王の誠を感ずればなり。是れ皆時に當つて賞を得たり、謀を惟帳の中に圖らし勝を千里の外に決せし者なり。夫れ未萌を知る者は六正の聖臣なり、法華を弘むる者は諸佛の使者なり。而るに日蓮忝くも鷲嶺鶴林の文を開いて鵝王烏瑟の志を覺り、剩へ將來を勘へたるに粗符合する事を得たり、先哲には及ばずと雖も定んで後來には希なるべき者なり。法を知り國を思ふの志尤も賞せらるべきの處、邪法邪師の輩讒奏讒言の間、久しく大忠を懷ひて未だ微望を達せず、剩へ不快の見參に罷り入ること偏に難治の次第を愁ふる者なり。伏して惟みれは泰山に昇らざれば天の高きを知らず、深谷に入らざれば地の厚きを知らず、依て御存知の爲に立正安國論一卷之を進覽す、勘へ載する所の文九牛の一毛なり、未だ微志を盡さざるのみ。抑も貴邊は當時天下の棟梁なり、何ぞ國中の良材を損ぜんや、早く賢慮を圍らして須らく異敵を退くべし。世を安んじ國を安んずるを忠とし孝とす、是れ偏に身の爲に之を述べず、君の爲め佛の爲め神の爲め一切衆生の爲に言上せしむる所なり。（遺六八七）

この御書は日聖遺人の愛國の精神を言ひ現されて居る御遺文中に於て最も能くその御精神が現れて居

ると思ふ。安國論を見るにつけてもこの一昨日御書から照らして考へると、その精神が一層明白になると思ひます。さうしてこれは龍の口の法難に直接の關係があるので、この書を捧呈された日の直〳〵その夜、松葉ケ谷の庵室を襲うて日蓮聖人を片瀬に引き出したのであります。それ故にこの御書は最も日蓮聖人の意氣が昂つて居る時に書かれたので、『一昨日御書』と名をつけたのは、この御文章の始めに「○○日見參に罷り入り候の條悦び入り候」といふことがありますから、その始めを取つて表題に置いたのであります、その一昨日どういふ事があつたかと言へば、當時の裁判所であつた問註所から日蓮聖人を喚び出して、いろ〳〵讒言のあつた條條に關して訊問を遂げたのであります。所が聖人は一々申開きをせられて、無論讒言でありますから、事實に就ては僞な申立をして居ることであつて、日蓮聖人の辯明に就て抑へ所が無いことになつてしまつたのである。それ故に聖人の方で手控へて居られたならば、或は龍の口の法難は起らなかつたかも知れない、けれども日蓮聖人の心の中に期する所は、勳持品の豫言にある通り、どうしても今一段と強く迫害が現れて來て、頭の座にも坐り、流し者にもされるといふことでなければ、勳持品の豫言を身に讀むことが出來ないやうな譯であるのみならず、日蓮聖人の熱誠からしてはどうしても鎌倉を諫めて、さうして大義名分に基いて京都の朝廷を大切にするやうにしなければならぬのであります、一方は勤王の誠忠よりして一段強く鎌倉政府を諫めやうといふ考へて之を書かれたのである。一面には法華經の御爲め、一面には日本の國の御爲にお考へになつてこの御書は

書かれて居るので、この文章の中にも「法を知り國を思ふの志」とお書きになつて居りますが、洵に能く法と國との兩方を併せてお考へになつて、所謂法國冥合の精神が事實に玆に動いて居るのであります玆に摘出したのは全文ではありませぬが、凡そ文章の大事なところは全部暴つて居るのでありまして極く短かい文章であります。

「方今世悉く關東に歸し」といふのは、承久の亂よりして京都の勢力は全滅されて鎌倉の勢力旺盛な場合でありますから、總て鎌倉の方に隨さ從ふやうなことになつて參つた、即ち「人皆土風を貴ぶ」て、鎌倉は關東武士の禮節を學ばない野蠻な風があるのでありますから、土風といふことは鎌倉を指して言うて居るのである、京都の朝廷の方を仰がないで、鎌倉の土風を貴ぶやうな風になつて參つた、洵に慨嘆に堪えぬといふことを現はして居るのである。さうして之を鎌倉幕府に提出したのでありますから、彼等が驚いて「事を佛法に寄せて政道を紊る者」といふ評議に依つて日蓮聖人を處刑したのであります丁度日蓮聖人の方からは法を知り國を思ふと言つて居られる、鎌倉幕府では事を佛法に寄せて政道を紊ると申しましたが、その工合は洵に能く相對して居る譯である。「就中日蓮生を此の土に得たり」て、日蓮が日本の國に生れた以上、國を思はぬといふことは出來ない。これも洵に尋常なことのやうでありますけれども、多くの佛教徒は現在といふ事を輕んじ、隨つて國家をも忘れて、唯だ死後の魂の行末に就て極樂往生といふやうな方にのみ心が奔ることの故に、愛國心を失つて居つたのは事實である。殊に淨土門若くは禪宗といふやうな手合は、現在を輕く

見ること故に國を思ふ精神が薄らいて居り、若くは全滅されて居つた。それを日蓮聖人の方は、何處まても愛國の精神を發揮せられ、日本人として日本に生れた日蓮が日本の國を思はずには居られない。それ故に日蓮の主張からは『立正安國論を』作つて、既に故の最明寺時頼の時に宿屋の入道を以て之を提出致した次第である。所が安國論に書いて置いた通り他國侵逼難が盛んに起つて參つて――丁度蒙古の來寇といふことが文永の役と弘安の役と南度ありましたが、その間にも彼は種々なる畫策をして、日本の國情を偵察し、何處までも日本を滅ぼさうとして居つたことは歴史の證明して居る事柄である、その事を仰しやるのである。日蓮が安國論に書いて置いた通り、近年は益〻異敵が我國を窺ふやうなことになつて來た、先年勘へて置いた所は今日に至つて符節を合す如くに他國侵逼の難が迫つて參つて居ることである。斯樣に國家の憂ひに先だつて安國論を捧呈した日蓮は、實は賞せらるべきことであるので、丁度周の西伯即ち武王が殷の紂王を討つ時に太公望を優遇したこと故に、太公望は喜んで西伯を援けた、又張良は沛公を援けて秦の朝を討つたのであるが、それは沛公即ち漢王の誠を感じて忠節を盡した譯である、さうして太公望でも張良でも皆その功績に對してそれ〴〵に賞せられて居る譯である。謀を帷帳の中に回らし、勝を千里の外に決した所の、孰れも智謀絶倫の人々であるが、日蓮は自から之を以て比して居るのである、日蓮聖人が唯だの坊さんでないことが洵に能く判かる、太公望が周の武王を援け、張良が漢の沛公を助けたやうに、自分は日本の國の爲に謀を献じて國家の安泰に貢献しやうとして居る者である。又古來「未萌を知る者は六正の聖臣なり」といふことがある、これは『貞觀政要』に出て居る言葉でありますが、所謂先見の明といふものがなければ、迂つかうして居つて足下から鳥が立つやうに、事の出來る度毎に狼狽するやうでは國家の大事を擔任することは出來ない、それ故に立派な家來であるならば必ず未萌を知つて、その事に先立て國家の爲に盡さなければならぬ。「六正の聖臣」といふのは忠臣とか良臣とかいふやうに、家來に六つの名前がある、それを言うて居るので、何れも至誠を以て事に先だつて君國に貢献する所の者をいふのである。これは世間のことであるけれども、法華經を弘める者は一段深い所から出て佛樣のお使ひとなつて、さうしてやはり目的は人を救ひ國を護る役を勤める所のものである、般若心經や阿彌陀經などをやつて居るやうに、死んだ人間だけを引取るといふやうな意味のものではない、法華を弘める者は諸佛が現在の人の世を救はうとお考へになつた、その目的に依つて出て來て居る、大體死んでから後を救ふといふやうなことは、諸佛の考へには無いことである、誤つた宗教家が言ひ出したことである。「然るに日蓮忝くも鷲嶺鶴林の文を開いて」――即ち法華經である、靈鷲山に於て法華經を說かれたので、文章を飾つて鷲嶺と言はれた、鶴林といふは釋迦入滅の時の跋提河の光景が、樹が皆白くなつて「白鶴の如し」と言はれて居る、それを沙羅双林とも言へば略して鶴林ともいふので、涅槃經のことである。即ち法華經の文なり涅槃經の文を開いて、さうして「鵝王烏悪の志を覺り」――これは佛樣のことを鵝王烏悪と申すので、頭の肉髻相やなどから斯ういふ言ひ

方をしたのであるが、皆文を飾つたに外ならぬ。法華涅槃の文を開いて、佛の御精神のある所を悟つて居る者である。さうして事實の問題に就て日本の前途を勘へた時に、立正安國論に書いたが如くに、我國には他國侵逼の難起つて國家に危ふからんとするこれには人心を正うし、教を重んじ、さうして舉國一致に依つて日本の國を護らなければならぬ、それには無論大義名分を明かにして朝廷を中心に立てゝ行かなければならぬ、鎌倉北條の如く自家の利益を考へて國家を忘れ、大義名分を忘れて居るやうな者を戴いては、この強大なる敵國を控へてどうすることも出來んぢやないか、斯くして偉大なる教の方から勘へ、國體の方から勘へて、日本の國家に貢献しやうと思うて居るこの日蓮の志は、先哲には及ばないかも知れない、それは段々えらい人もあるからそれには及ばぬかも知らんけれども、後來には日蓮だけの者は容易にあるまいと思ふ――此處にも先哲を貴んで居る意味が洵に善いと思ふ。今の人の言ひ方で言つたならば、古い者などは迚も吾輩には及ばぬこれからは進歩の世の中だから、えらい者が出て來るかも知らんけれども……斯ういふ言ひ方を現代人はして居るけれども、日蓮聖人は自から任じて後來には日蓮だけの者は出まいといふ位に確信を發表されて居るのである。この日蓮の法を知り國を思ふの志は最も賞せらるべき事柄である、國家は一面には教を正しうし、所謂今日申す思想の善導を本にして行かんければならぬ、人心の頽廢、思想の惡化といふことは遂に國を危うするのであるから、眞に國を鞏固にしやうとするならば、法の側から勘へて行かなければならぬ、即ち思想の側から健實にして行かなければならぬ。併ながら思想を研究するからと言つて、現代人の或る者のやうに國も忘れてしまつて、唯だ「思想は自由である」とかいふやうなことて、面白半分に勝手々々なことを考へ、或は宗教に文學に、種々なる思想に囚はれて國に累を爲すことを念としないやうな者は、無論誤つた者である。又その半面には國家を思ふ心があつても、思想を輕んじて、唯だ外部からの政治、經濟、武力に依つてのみ國家を鞏固にし得ると考へた淺見者流は、今日に於てやはり採るべきものでない。その偉大なる點を日蓮が一言にして「法を知り國を思ふの志尤も賞せらるべきの處」と言つた、昔はこの大切な事が判らなかつたが、今日にして思ひ當つて「ハヽア成程日蓮の愛國心こそは現代に適當したる所の、思想の側と國家の側とを結合せしめて行く眞にこれは現代を指導する大切な愛國者であつた」といふ事を了解し得られるのである、それも未だ了解せぬ者が澤山居る譯であるが、實に離づべきことであらうと思ふ。世が世であるならば桓武天皇が傳教に歸依せられたが如く、或は支那の隋の皇帝が天台を尊敬せられたが如く、又或は周に於て太公望を重用し、漢に於て張良を重用したやうに、日蓮は我が日本の國に於て大切にさるべき者であるにも拘らず、却つて邪法邪師の輩が讒言をすることをお用ゐになつて、一昨日は日蓮を罪人のやうな扱ひにして問註所に引出された次第である。日蓮は罪惡は有つて居らぬが、忠義の心には燃えて居る者である、その忠義も一通りの忠義ではない、根柢深い所謂大忠を懷いて居る者である、さうして懷いたその志の一分だも達せずして今日に來て居る。それが「剩へ不快の見參に罷り

入る」て、罪人扱ひをされるやうなことになつた、これはどうしたら宜いか、殆ど救ひやうの無い有様てある、二重にも三重にも間違つたやり方てある、大いに貰すべき者を貰さないといふならば一重の誤りてあるけれども、貰しないのみてはない、それを罰せんとするといふに至つては、殊に大忠を懐いて居る者を罰せんとするに至つては、何といふ間違ひてあらうか。又實際國を思ふに就ては唯だ一通り反相的に考へては、この日本の天職も判らず、又日本の現在に懼ふる上から考へても判らぬことて、恰も「泰山に昇らざれば天の高きを知らず、深谷に入らざれば地の厚きを知らず」といふが如きものてある。普通の政治家、普通の愛國者は今日の日本の大事を了解することは出來ぬてあらう、仍つて更に安國論を差出したから御覽を願ひたいと思ふ、嘗て故の最明寺時頼殿の時にも提出は致したけれども、程經て今日時宗殿に於ては御承知無いかも分らんから、更めて先年勸へたる所の安國論をその儘差出す次第てある——これは日蓮聖人が鎌倉を諫められたのが前後三度といふのてありますが、最初に時頼に安國論を提出した時と、この一昨日御書提出の時と、佐渡から歸つて來て殿中に於て直接籠の中に時宗が居る時に、大いに安國論の精神を力說したこと、之を三度の國諫と稱して居るのてある。これは即ち第二の國諫の事てあつて安國論を茲に提出したのてある。さうして言はれるには、この書物の中に載つて居る事はいろ〳〵書きたいこともあつたけれども、その中の僅かの部分しか書いて居らない、自分の志の在る所を盡すことは出來ないが、併し大體は書き載せて置いた譯てある。「抑〻貴邊は當時天下の棟梁なり」即ちこれは頼綱に對して直接出したのてあるけれども、頼綱は北條の内管領の役を勤めて居るのて、直ちにそれが時宗に通ずる譯てある、故に「天下の棟梁」といふことは頼綱のやうてもあるけれども、モウ一つ奥の時宗に宛てゝ日蓮聖人は言つて居られるやうに思ふ。然らば國中の良材を損するといふことはあるべきてはない、どうぞ國を思ふならば人物を大切にしなければならぬ、眞に日本の前途を思ふならば日蓮の如き者は大切にせられんければならぬてはないか、然るに讒言に聽いて日蓮を罪せんとするが如きは、全く間違つたやり方てある、その考へ違ひのことを改めて、さうして左樣な事よりは蒙古襲來の大事に對して、益〻國防を嚴にし民心を陶冶して國家の大事を誤らぬやうにしなければなるまい。世を安んじ國を安んずる所の、この全體の爲に盡すことが眞の忠てあり又孝てある。必ずしも親の爲に膝下に居て親の欲する所を滿すといふ事が孝といふ譯てはない、日本の眞の忠孝は、國家の爲め全體の爲に盡す中に、そこに眞の忠もあり孝もある譯てある。それ故に日蓮の主張も個人的獨善的なる主張をする譯てはない、全く自分一人の利害などから之を申す譯てはない、廣く日本の「君の爲め佛の爲め神の爲め一切衆生の爲めに」申上ぐる次第てある。茲に君の爲め佛の爲め神の爲め一切衆生の爲と書いて居られる中に、非常に思想が調和されて居る事を見るのてある。君を思ふ忠節も、佛に盡す信仰も、又日本の神に對する敬神の念も、一切衆生を思ふ慈悲の念も、皆こゝに含まれて、さうして國諫といふ大事を爲されて居るのてある。その堂々たる精神に導かれてこの事を爲すと言はれた。所が前に申

した通りに「事を佛法に寄せて政道を案る」といふ評決に依つて日蓮聖人を龍の口に引出して、この夜頸を刎んと致した譯であります。日蓮聖人の愛國心はこの御書の中に洵に明白に現れて居ると思ひます。

三六、開目鈔　善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべし。大願を立てん、日本國の位をゆづらん法華經をすてて觀經について後生を期せよ父母の頸を刎ねん念佛申さずばなんどの、種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば用ゐじとなり、其外の大難風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ、我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ等とちかひし願やぶるべからず。（遺八一六）

この『開目鈔』は信仰の大切なることを敎へ、その信仰と同時に日本の國を思ふ志を現はして居られるのであります。『一昨日御書』にもある「法を知り國を思ふ」といふ風に、信仰と道德が日蓮主義の上には相離れない關係になつて居るのである。これが現代に非常な大事な點である、唯だ昔のやうに信仰とか理想といふものを抑へ込んでしまつて、唯だ一概に國を思はさうとしても、それは駄目ナンである。人間の要求として種々なる事を考へて、或は宗教に文藝に、哲學に、種々なる學問の上から思想の動搖が起るのである、その思想を抑壓して「何も考へるな」といふやうな型を以てやつて行かうといふことは間違つて居る。それ故に信仰は飽く迄も之を歡迎して、同時にその信仰が愛國的なる觀念と能く結びついて働く所の思想を迎へて來なければならぬ、昔のやうに信仰を蔑視して愛國心に來て居る者は古い型である。又信仰とか理想を求めるが爲に國家觀念を捨てるやうな輕佻なる者は、所謂危險思想である。それ故にそこの所が日蓮主義に於て餘程よく結びつけられて居ることを見るのである、法華經の信念から言へば、善につけ惡につけ法華經をすつるといふことは地獄の惡業である。善について捨てるならば差支ないぢやないかといふ考へが起るのでありますが、これが生ぬるい人等の頭腦に何時も禍ひして居る、今でもさうである、日蓮主義研究者でも、法華經の信仰に就いたやうな就かんやうな、世間並みのやうなことを言つて居るのは、この「善につけ惡につけ」といふ徹底的なる觀念が判らないからである。如何に他のことが善いと言つても、法華經の信仰より大切なものはない、貴さものはない、どのやうな事があつても——親の命令であつても、命令といふことは重い事だからと言つても、法華經の信仰を捨てるといふやうな親の命令は決して貴いものではない。それ故に法華經の信仰は、如何なる事があつても之を捨てゝはならない、他の道德上の事からして之を批判することは出來ない。それならば「さう頑固な事をいふやうでは困るぢやないか」といふ事を直ぐ心配する人がある。加藤弘之君などもそんな事ばかり心配して居つたやうだけれども、宗教の信仰は絕對の價値を持つものであるから、命を捨ても信仰は捨てぬといふ所に妙味がある。同時にそ

といふと、それは思想に頭を突込んで居る者が勝つてしまふ、一切は思想から出て來るものであるから思想の研究を積んで行つて、盛んに人心をその方に引張つて行く運動をすれば、外部から法律や餌で幾ら喧まし く言つても、終ひにはその思想運動の爲にやられて、國家はそれが爲めに覆沒せざるを得ぬのである。その事を日蓮聖人が言つて居られる。「法を知り國を思ふの志」と言つて、唯だ國を思ふと言つても、人心を指導すべき明教を失つた時は國家は立つものではない。然るにその事を知つて居る政治家や學者が居らぬ、又坊主の方は教さへあつたら國などはどうても宜いといふ淨土門や禪宗みたやうなものが蔓つて居る、政治家は鎌倉のやうに自分の門閥の利福を圖りさへすれば事足れりと思うて居る。斯の如き低級なる政治家、淺薄なる宗教家に國家を委して置いたならば、必ずや蒙古襲來のことに端を開いて、遂に日本の國は危くなる。內には綱紀紊亂して大義名分地を攘ひ、この貴き國家の天職を達することが出來ないといふ事を慨嘆して、眞に國を思ふ所の熱烈なる愛國心の爲めに、日蓮聖人は命がけて鎌倉と戰はれた。この意味から考へた時日蓮の如き愛國者はその類が少ない、さうして今日の我國に取つて最も適切なる模範者であるといふことが判ると思ふ。水戸の中學校でこの頃騷いで居るのでも、「思想研究としてはいろ〳〵言つても宜からう」といふことを考へるものだから、校長などがいろ〳〵な事を言ふので、惡い事とは思うて居る譯ではないけれども、個人道德の方が國民道德より意味が深いとか高いとか言つて居る、そこでいろ〳〵と騷ぐのである、それは十分研究せぬからそこに缺點がある。

けれども、兎にも角にも思想といふものに囚はれゝばそんなものに成つてしまふ。だからそれを能く教へて、眞の日本の國民精神を率ひて行く教化の方針は斯ういふものだといふことを、壓迫などを以てやらないで、やはり正々堂々理義の上に於て彼等を服せしむるだけに、即ち日蓮が茲に言つて居る通り、智者あつてその義を破られるならば從ふ、威すに刀を以てしては駄目だと言つた、この思想運動を理解して、さうして人心の健全を圖つて行かなければならない。さういふ意味に於て日蓮は「日本の柱とならん」——「法を知り國を思ふの志」で、國を思うて法を忘れ、法を知つて國を忘れるやうな偏僻の者は日本の國に存せしめないといふ點に於て、日蓮は「日本の柱」といふことを自から任じたのである。故に「日蓮を倒す者は日本の柱を倒すものなり」と斷言した。所が當時の日本の文化はやはり幼稚であつたものであるから、それがはつきり判らない、眞言亡國と日蓮が言つても「あれは宗旨の惡口を言つて居るのだ」と思うて居つた、けれども今にして宗教や文學や思想が人心に影響し、遂に國家を危うするといふ、この事が適切なる實例を示されるに於て、初めて「成る程そんなものかナア」とぼんやり考へて來て居る位のことであります。まだ日蓮の純忠至誠を眞に感激するのは數年の後であらうと思ふ。

三七、眞言宗私見聞　釋迦如來は正しく娑婆有緣の導師、一切衆生の主師親なり、重恩他に異なる。我等生を忍土に受けて飽くまで恩澤に浴す、設ひ邊鄙粟散の國なりと云ふとも我國を思ふ

べし。微子は殷の國に居て王を諫む、焦燒醜陋なりと云ふとも我親を親とすべし、唐堯は老ひたる母を敬ひ、虞舜は怨める父に孝しき。孔子云く、其の親を敬せずして他人を敬ふ、是を惇禮と云ふと云云、主師親に隨へば孝高の名を流し、冥の照覽に相應す、是に逆へば無量の逆罪を招き、亡國墮獄の業を結ぶ。（遺文續集三〇）

茲には尙ほ一層その日蓮の道德觀念が鮮かに示されて居ると思ふのである、それは因緣の關係を能く敎へたので、釋迦はこの娑婆世界に緣あつて出て、我等の爲に主師親の三德を有つて居ることが尙に明白である、他の佛は何も敎を吾々に與へたものでない、「重恩他に異なる」で、他に幾らえらい佛があるとした所が、釋迦のやうに直接に我等の前に出て我等を救ふべく活動した佛は無いてはないか、我等は生をこの忍土、即ち娑婆世界に受けて飽く迄釋迦の敎の下にその恩澤に浴して居るのである。それであるから敎の方から言へば釋迦を忘れるとは出來ない、又國の方の觀念から言つた時にはどうであるか、假令我が日本の國が「邊鄙粟散の國」即ち片隅にある小さな粟粒が飛んで居る位な島國であるからと言つても、日本の國に生れた以上は日本の國を大切にしなければならない、娑婆世界に生れて釋迦の敎に因緣を結んだ以上は、假に釋迦以上の佛があるからと言つても釋迦を捨てることは出來ない。日本の國民と生れた以上は日本より良い國があると假定しても日本の國を捨てゝその佳い國の方に就くといふことは出來ない。であるから微子は殷の國に居て王を諫めた、他の者はその國を捨てゝ去つたけれども、微子だけは何處までも殷の國に踏み留まつて、如何にその國家が成らうともこの國を捨てゝ他に自己の幸福を求むることは出來ない、「死なば諸共」といふことに依つて殷の國に踏み留まつてその國に盡した。日蓮の愛國心もそれである、この國がいけないからと言つてそれを見捨てゝ他に行くといふやうなことはない。又之を家庭に於て考へたならばどうであるか、「焦燒醜陋なりといふとも我親を親とすべし」で、自分の親が日に燒けた百姓爺で醜い品の惡いやうな者で、一緒に歩くのが耻かしいと思ふやうな者でも、自分の親は親として尊敬しなければならぬ假令無學であらうが人格が無からうが、因緣を以て

その田吾作の子となつた以上は、田吾作を親として孝行しなければならぬ。それ故に支那の聖人と言はれて居る堯は老いたる母を敬つた、この母は何もさうえらい人といふ譯ではない、けれども自分は聖人であつても母は母であるから之を大切にせられた。又舜は自分の親が後妻の爲めに心を奪はれて、非常に不親切なことを言つたけれども、假令親は不親切でも子は子でなければならぬといふので孝行を盡された。「舜は五十にして父を思ふ」と孔子も言つて居るが、年老つても親の事を忘れないで孝行をせられた。その親が立派な人だからといふのではない、假令親が惡くとも因緣のある所は親を大切にしなければならぬ。又孔子は『孝經』の中に言うて居る、自分の親を敬はずして他人を敬ふは禮に悖つたことである。即ち道德には順序がある、所謂義といふもの

があつて、自分の親を敬はずして他人を敬ふは義に背く、寧ろ他人を敬はぬ方が宜しい、自分の親を捨てゝ置いて乞食を助けるといふやうなことはいかぬ。それであるからこれは家庭に於て、國家に於て、宇宙に於て、各々その範圍は違ふけれども、その道德の秩序は同じ事である。家に於ては醜い親でも親は大切にしなければならぬ、國に於てはその國が小さからうがその國を愛さなければならぬ、敎に於ては釋迦牟尼が佛として此土に出て來たのであるから釋迦以上の佛は書量品の顯本から見れば無いけれども、假に方便の敎の方から眺めて大日如來が釋迦よりもえらい佛だと言つたからといつて、大日は何處の佛だ、娑婆世界有緣の釋尊を拋つて輕卒に大日に趨るといふことはない。この觀念を宗敎の上、國家の上、家庭の上に於て統一して日蓮聖人が勘へて、眞言亡國論を吐いて居ることが、この文章に於て洵に明白に知らるるのである。其處まで日蓮の主張を味はつて可否を言はずして、唯だ日蓮が固陋だとか頑固だとか、惡口を言つたとかいふやうな事を學者輩も言つて居るけれども、それは決して學者ではない、唯だ好い加減な所で學者ナンといふ名前を與へたからいけぬ、そんな事では本當の學者とは言へない。今頃になつて宗敎と道德と國家との關係が大事ぢやといふやうなことを、漸く顏を洗つて氣がつくやうでは駄目ぢや。それで日蓮聖人の惡口などを言つて、今でも學者輩が大切にするのは二宮尊德であるとか、或は平田篤胤といふやうな佛敎の惡口を言つたやうな、それこそ頑固爺をえらいやうに言つて居る。それも或る點に於ては採るべきだけれども、迚もこの偉大な東洋の宗敎、哲學、倫理の根柢を突いてさうして大なる宗敎的慈愛の精神から活動した日蓮と、二宮尊德などとは比較すべきものではない、その輕重さへ判らずに今日まで多數の政治家なり敎育者なりが來て居るのである。

この『眞言宗私見聞』の文章は、洵によく日蓮の道德觀念を言ひ現して居るのである、だから主師親に事へて、家庭に於ても國家に於ても宇宙に於ても この恩義を道德の基礎に置いて考へて行かなければならぬ、それで孝高の名を流しさへすれば冥の照覽に相應すて、世間の道德も神や佛がお守りなさる事も――即ち宗敎の加護も世間の道德價値も相應じて見るべきものである、これに逆つたならば多くの罪を作つて、不道德といふ事と同時に、それが亡國の原因を成し墮獄の業を結ぶのである。墮獄といふ宗敎的の感情も、亡國といふ國家的の事柄も、道罪といふ個人的の事柄も皆結んで日蓮は論じて居る。或る者は「墮獄」ナンといふ言葉を聞いても何も印象を與へない政治家や學者が今日は澤山居るだらう、又或る思想家は今日「亡國」などゝ言つた所が、寧ろ亡びたら宜からうといふやうなことを言つて居る者もあらう、一遍亡びて見たら頑固な奴が氣がつくだらうとか、亡びて見るのも隨分變つて面白いだらうといふやうな事を言ふ者がある。亞米利加と日本と戰爭をしたならば、日本が負けた方が面白いだらう、今迄の頑固な奴が皆弱つてしまふだらうといふやうな事を言ふ者がある。これは敎の誤りてありますが、どうしても相互の疏通をしやうといふに就ては、所謂健全派が餘程よく考へて固陋な觀念を直すやうにして行かないと、固陋と輕卒とが鉢合せをやつた時、國を危うする事に相成るのてあります。

佛教の大要

（名古屋自慶會勞働講話）

本多日生

この頃人の心が動搖して、日本に於ても困つて居るが、世界に於てもこれが一番大切な問題になつて居るのである、人の心は好い鹽梅に導けば佛樣にもなるけれども、放任して置けば惡い事ばかりするものである。今は慢心はして居るけれども、存外人間の心が墮落して來たのである、學者といつても物は知つて居るけれども、心は墮落して居るのである。政治家も墮落して居るのである、坊主も墮落して居るのである。勞働者も墮落して居るのである。墮落のは、ち合せナンである、そこで議論のみ喧ましくなつて、事實は次第々々にまづくなつて行くのである。斯ういふやうに人心が墮落するのを喰ひ止める一番大切の力は、宗教の信仰に歸るといふことナンである。これは世界中の偉い人を集めて相談したら、その通りといふことに決るのぢや、馬鹿を寄せれば詰らぬ事を言ふけれども、偉い者が集つたら、やはりこれは宗教の信仰に歸らなければ駄目ぢやといふことに一決するのである。

これは今より百五六十年前から宗教の信仰を輕んじて、さうして物質文明といつて、唯だ錢を儲けて旨い物を食はうといふやうな風に、段々なつて來たのである、初めはその方が良いやうに思つたけれども、段々推詰めた所が我慾と我慾の突張り合になつて、そこで國と國との間には爵羅巴の大戰爭が起つて、一切の文明を打壞し、どうにも斯うにも行止つて困つてしまつたのである。今日流行る「改造」といふことは、困つたからどうかしなければなるまいといふ「雪隱詰め」といふ言葉である、勞働問題と云ふのも、國の内に於て經濟關係が鼻を突いて、どうにも斯うにもいかぬから、そこで矢釜しく云ふやうになつて來たのである。それでうまい考が決まつたかというと、未だ決まらないでまご附いて居るのぢや。それが何とか問題、カンとか問題といふやうになつて現れて來るので、問題といふは鳥もちへ足を突込んで居るといふことぢや、左樣にしてマゴマゴする内に段々鳥もちがひつ附いて、どうにも斯うにもならなくなり居る。段々羽根にもちが引ついてバタ〳〵し居るのが今の有樣である。これを救ふにはどうしたら宜いかといふと、當面の問題を暫く離れて、人の心を淨き高き所に導いて、さうして宗教の信仰に戻さんければならぬといふことになるのである。それが世界の文明の破產を救ふ所以である。今の日本の國家の危急――困難を救ふ所以である、又人々がいろ〳〵苦みが多くなり、不安に襲はれて心配に傾くのを救ふのは、唯だ一つ宗教の力にあるのである。これ以上給金を增しても、こつちを良くすれば、あつちが困るといふやうな譯で、給金を取る方から言へば幾らでも給金が殖えれば宜いといふ

けれども、給金を殖やせば物價も騰る、こつちを押へれば向ふが上るといふやうなことで、一枚の袢纏を嬶が着て出れば亭主は素ッ裸で居る、亭主が着て出れば嬶は褌袢一枚といふやうな譯で、どうしてもうまく行かぬのぢや。これは唯だ給金の問題でもなければ勞働問題でもない、モウ一つ人間の我慾を制限して、さうして自分の產出す力の一部は人に與れてやるといふ精神にならなければ、治まりが附かぬものである。三つ拵へた者が三つとも取つて歸るといふことになつてしまつたならば、そこに何も殘らぬから、社會の爲め國家の爲には一つも出て來ないのである、三つ造つたものを二つだけ自分が貰つて、一つだけは何にても使つて下さいといつて出すやうになつて、初めて社會も發達し國家も發展するのである。然るにサボタージュをやつたり、ストライキをやつたりするのは、丁度二つしか造らないで「三つ分よこせ」と言ひ出すやうなことになるから、迚も足らないことになつてマゴ〳〵するのである。打つても叩いても無いものは出せないから、そこで會社は閉鎖するといふことになつて、職工は業務を失ひ、泥棒になるか、首吊るかといふ事になつてしまふ。先きの見えた事ぢや。

それであるからお互ひ個人の本當の幸福を求めるならば、物質以上に精神の喜悅といふものがあつて懷中に錢が無くなつても、掌を合せて拜めば誠に有難い悅びといふものが得られるやうに、心配な事が起きても人に相談に行かないでも、自分の心だけで捌いて行けるやうに、自分の精神の力が發達するやうにしなければならぬものである。さう人ばかり賴りにした所が、向ふも好い加減弱つて居るので、因つて心配〳〵して居る所に、「御免なさい、今日は」とやつて行つて、「實は私はこんな心配があるんですがどうしたら宜いてせう」と言つた所が「ちよつと待つて呉れ、お前の世話どころぢやない、こつちはモッと大きな心配があるんだ」といふやうな譯で、心配する奴ばかりが寄つた所でさつぱり駄目なものである、人各々がこの心配を逐拂ふやうに、力强く人生は渡らんければならぬ、それには宗教の信仰に戻るより外ないものであります、それの分らぬ者は學者であらうが、政治家であらうが、それ等の人達はバイ〳〵といふものである、そんな人は物識りのやうな顏をしても駄目である。健全なる宗教を捨てて人生の幸福は無いといふことは、相場が決つて居る、決つて居るものを百五六十年の間ガタ〳〵やつて見たのだ、「宗教の信仰を離れても人生に幸福あり」といふことでやつて見た、所が果せる哉、行止つてしまつた、今日はどうにも斯うにもならなくなつて頭を下げて宗教の元に戻らなければならぬことになつて居るのぢや、けれどもそれは少し體裁が惡いから頭を下げずにソーッと裾の方から潛り込まうかといふやうな手合が居る。併し本當に偉い人ならばビッタリ頭を下げて、「大きに恐入りました」、世の中は經濟や政治や軍備や錢金ばかりで行くと思つたのは間違つて居りました、人の心を淨くし、高くし、精神を磨き上げるといふことをしない限りには、健全なる文明は造れませぬ」と言つて、兜を脫がんならぬ時が來て居るのぢや。

そこであなた方にしても一番大事なことは、どうしても信仰に入ることである。私は法華宗の坊さんだけれども、何も法華宗の信心をセイとはいはぬ、

小さい宗派の事などは言ふのぢやない、必ずしも佛教に來いとも言ふのぢやないけれども、先づ兎に角日本人だから、佛教の大要を心得て見て、氣に入らんければ天理教へ行かうが、とほかみえみため、へ行かうが勝手だけれども、兎にも角にも佛教が日本人大體の宗教であるから、どんなものだといふことを御參考にお話するので、宗旨宗派の枝葉の事には一切話は這入らない、お釈迦様の教へられたる佛教の事を極くザッとお話するのである。

時間が無いので精しい事は言へないけれども、先づ大體お釈迦様はどんな人かといふことを、一通り知らなければいけない。お釈迦様は天竺の迦毘羅衛國といふ立派な國があつて、其の國の王様の子である悉達太子といつて、生れながらに賢い立派な人であつた、それが大きくなつて、美しい耶輸多羅女といふ嫁さんまで貰つたけれども、人生の目前の快樂を捨てゝ、大勢の人の心の惱みを除いて、この世も助け、未來も助けて衆生を濟度しやうといふ、非常な立派な精神を起されて、夜半に王城を脱け出て、乾陟といふ馬に打乗つて、車匿といふ氣に入りの馬丁を連れて、さうして跋迦婆仙人の所に行つて教を尋ね、去つて又迦藍阿羅邏仙人の所に行つて教を尋ね、彼も亦語るに足らぬといふので、正覺山の麓に六年の間行を積んで、最後菩提を成就せられて佛様となられた譯である。それより華嚴經を説き阿含經を説き、方等經を説き、般若經を説き、法華經を説き、涅槃經を説き、一代五十年の間の大説法をやつて、さうして跋提河の邊、沙羅双林の内に目出度く涅槃をなさつた方である。その教は今に傳はつて、日本に來て居るだけでも一切經は七千餘卷と稱せられて、立派なお經が遺つて居るのである。その我國に傳はつた年代も既に千四百年にも及んで居るので、諸君の先祖は悉く佛法を信じて、到る處何處にもお寺がある、今日はどんな村にも山の奥にもお寺があつて、佛教衰へたりと雖も十七萬からの坊さんが未だ居るのである。その中にはやくざな者も澤山居るけれども、それがどうにか斯うにかノラクラして飯を食つて居るのは、やはり佛陀——釈迦如來の有難い事を思ふ人があつて、そのノラクラ坊主を養つて居るのである、それに又女房もあり、子もあり、門番もあり飯炊もあるといふ譯であるから數百萬の者が佛教の中に生活をして居る譯で、實に偉大なる力が存して居るのである。それは日本だけであるが、世界の人類の中では八億以上の者が佛教信者であつて、世界の宗教中一番多くの信者を有つて居るものは佛教である。

その教は一切經となつて遺つて居つて、色々大切な事が説いてあるけれども、極く要點を申すと、お釈迦様はこの世も良いやうに、死んだ先きも良いやうにといふ事を説いたのである。先づこの世に於ては何が大事かといふと、第一に仕事を選んでそれに骨を折らなければならぬと言はれて居る、人間は遊んで居つては駄目だ、業務を選んでそれに熱達をし精勤をすることである、その仕事に十分馴れて、經驗を積んでそれに精を出して行くといふ、熱達精勤といふことが大事ナンである。坊主になれば坊主の事を一生懸命に、怠らずやつて行かなければならぬ職工になつたらその職工の業務がある、それに向つて熱達し且つ精勤しなければならぬといふので、何も難かしい事はない。その反對は、餘りその仕事に

馴れないて、次から次へと仕事を變へて、渡り職工といふやうなことになつて、のらりくらりして、さうして行つた所毎に油を賣つて、サボタージュの先棒になるといふやうなことになると、不熟達、不精勤で、釋迦の教に反對になるのである、それでは人生の幸福は無いと說かれて居る。それから第二には得たる所の錢を皆使つてしまつてはいけない、汗を流して得たる錢であるから、大切にして貯蓄して行かなければならない。第三には善き人の話を時々聽かなければいけない、自分ばかり威張つて居るといふとツイ料簡が拗れるから、どんな偉い人でも教を聽くといふことを忘れてはならない。モウ一つは生活をするには曲つた事をせぬやうに考へなければならぬ、この仕事よりはこつちの仕事の方がうまい、こつちは汗を流して働かなければならぬけれども、他の仕事をやれば樂で錢が儲かる。例へば淫賣屋でも始めれば、五十圓ほどの資本があつて二人か三人引張つて來れば出來る。さうして淫賣屋でも始めたならば、自分は酒を飲んで寢て居つて日に五圓宛になる。その方が宜からうかナ……さういふ事を考へてはいかぬ、正しい意味に於て人は生活するといふことを忘れないやうにせよと言はれた。先づこの世の中に於ては今の四つの事——業務に熟達精勤すること、得たる金を大切に保存すること、善き人の話を時々聽くこと、正しい意味に於て生活すること、これを決心せよといふことを佛は始終說かれたのである。

それから死んだ先きの未來の爲めには、人間は死んでも魂は消えないて、果報を傳うて行くから、その死んだ先きの爲めにはどういふ事が大切かといふと、玆に定まつて居る所の戒といふものがある。惡い事をせぬやうに、善い事をするやうにといふ戒といふものを能く守つて行かなければならぬ、それは一時の迷ひの爲めに惡い事をするけれども、惡い事をするは一時、苦みは永い間の事である、泥棒するにしても、金を五圓なり十圓なり盜んで來て一時は悅んでも、一バイ飲んでしまへばそれて消えてしまふ、併しその盜をしたといふ罪は百年も千年も苦みの種となるものであるから、丁度米粒一つから又澤山の米が實るやうなものである、米などは一年で枯れてしまふけれども、是が梅であるとか桃であるとかいふものであれば、種子は一つでも百年も二百年も毎年々々澤山の實が成るのである、さういふ譯で泥棒一つした爲めに何處までもその罪が附いて廻つて、頭を抑へられるといふやうなことになるそれは非常に損であるから、さういふ事をせぬやうにせよ。それから次には心がグラ〳〵してはいけない、心がグラ〳〵するというとツイ間違ひも出來るし、騙されもするから、少なくとも一日に三遍や四遍は心を落着けて、ジッと精神の靜まるやうにしなければいけない、それが爲めには端座といつてジッと坐つて、さうして心を臍の下の方に落著けるのである。ストライキなどをやる時には、必ず心は頭の天邊の方に逆上つて居る、心が腹の底に坐つて居る時にはストライキなどは起りはせんけれども、ソラヤレ〳〵ッといふやうな時には、魂が頭の上に來て居る、さういふ事になると騙され易いから、心を落着けよといふことである。モウ一つは施しをせよといふこと、これは資本家や金持の方は無論しなければならぬが、假令貧しい者でも施しは出來る。それ

は唯だ錢金を施すばかりではない。例へば暗い晩に提灯を持つて道を歩いて居る時分に、後の方から婆さんがやつて來た、別に頼まれた譯でもないから、自分は足が達者ナンだからといつてドン〳〵行つてしまへばそれ切りだけれども、それを親切に「お婆さん、お氣を附けなさい、ソラそこに水が溜つて居るから……」と言つて提灯をさしかけてやれば、即ち光を彼に施して居るのである、人は心懸けに依つては如何なる者でも施しを與へることが出來るものであるから、それをやれといふ事である。モウ一つは智慧といつて善惡を選んでさうして間違つた事を受入れないやうにすること、即ち今日の思想といふことに就ても、惡い思想を受入れぬやうにして行くやうに注意せよ、惡い思想を入れるのは毒を服むと同じことぢや、毒を服めば死ぬだらう、惡い思想を入れゝば遂に己れを害して行くものである、惡い思想などは別段差支ないと思ふだらう、詰らぬ事を聽いて「賛成ぢや」といふやうな事を言ふけれども、毒藥を出して「サアこれを服まんか」と言はれたら「賛成ぢや」といつて服む奴はなからう、惡い思想は毒を服むが如きものだと思つて行け、といふことを說いて居る。これを能く守つてさへ行けば死んだ先も惡い所には行かぬと教へられて居るのである。斯樣な事が佛教の極く簡單な意味合である。

尙ほ斯ういふ意味合を更に他の方面から考へると六つ程の事にして說かれて居るお經がある、それは那先經といふお經であるが、第一は「誠信」といつて、人の誠心を磨いて信心をせよといふ事、どんな人間にも尊い心といふものがある、これは學問をしなくとも金が無くとも、そんな事には構はぬ、却つて學問したり金があると誠心が隱れるものである、山の中に棲んで居る字を一字も知らぬやうな者を連れて來ても、人間天賦の眞心といふものは皆な持つて居るものである、屁理窟などを覺えるから誤魔化す事ばかりやつて、大抵の學問は眞心を藏ひ隱すものである、その眞心を開いてさうして其處に宗教の信仰といふものをやれば、それが一番宜しいのである、譬へて見れば濁れる水の中に珠を投入れたやうなもので、珠の力を以ての故にその周圍の水が清むのである、人間の心が濁れる水のやうになつて居つても、眞心の珠、信仰の珠といふものがそこに這入れば、濁つた心が清むのである、朝、顏を洗つて佛樣や神樣の前に坐つてお辭儀の一つもしたならば、どんな濁つた料簡でもそこに淨められる、癇癪玉でもグッと鎭まる、佛樣や神樣を見てコラ〳〵と怒り出す奴は無い、それは實に宗教といふものは不思議な力を現すものである。そこでその誠心といふものに依つて信心を開くといふことが宜しいが、それをやつたのは日蓮聖人などで、頭の座に坐つても畏れを懷かないやうな力が、そこに出て來るのである。人間は誠を盡せば、モウそれで死んでも宜しいといふ決心が附いて、少しも恐れが無くなる。第一今日の勞働運動などは强さうに言ふけれども、臆病根性が引つついて居る、大勢でワイ〳〵言ふけれども、これは恐怖心の現れと西洋の學者も言つて居る。資本家からやられる、政治家に騙される、イヤ坊主があんな事を言つて騙しに來た、何がどうした」と言つて、まるで神經病み見たやうにビク〳〵者であるから、大勢寄ると石でも摑んでヤレ〳〵ッと言ふけれども、それは勇氣でも何でもない、臆病根性の

祟りぢやと學者は言うて居る。そんなに怖がることはない、何も坊主が勞働者の敵でもなければ、金持も敵でもなければ、政治家が敵でもない、皆な同じ日本人で共に善くしやうと考へて居る、それを初めから敵ぢや、化物ぢやと思つて、石を懷中に入れて出だすといふことは、一種の恐怖病といふ病氣である。それは眞の信仰といふものを持てばそんなものは無くなつてしまふ、何もそんなに世の中は怖いものぢやない、「渡る世間に鬼は無い」て、到る處皆な佛のやうな溫順な考が出來て來るのである。

第二には「孝順」といつて、親孝行をし、親に順つて行くといふことがある、これは人間の一番明かに受けて居る御恩である、どんな者でも親の世話にならぬ者は無いのであるから、親の恩の辱いことを知つて、親孝行しやうといふ德がそこに開かれる所謂「孝は百行の本」て、大きな建物を建てるには地形からして掛からなければならぬ、名古屋のお城を建るには加藤清正が非常に地形に注意して大きな石を引つ張つて來てやつて居る。親孝行は地形みたやうなものであるから、大きな仕事をしやうといふ時には、先づ親孝行といふ事から始めなければならぬ。掘立小屋を拵へたり、天幕張りをするならば地形は要らんけれども、大きな建築をするには——立派な人間にならうとするには、親孝行の地形から改めて掛らなければならぬ。他人に如何に親切にするといつても、「貴樣の親はどうぢや」「俺の親は干ぼしぢや」といふことてあつては、其親切といふものは嘘のものである、親孝行といふこの一つの德行を有つて居らんければ、一切萬事が嘘といふことになるのである。そこてお釋迦樣が先づ第一に親孝行より進めといふことを說かれるのてある。

第三には「精進」といつて、これは善い事を始めても途中て弱り易いものてある、戰を開いても我が軍が負けさうになることがあるから、その時分には後から援兵を送つてこれを助けなければならぬ、谷將軍が熊本城に籠城の時、食ふ物が無くなつてしまつたが、幸に清正の建てた城て、疊の中に芋の芋苗が縫ひ込んてあつたので、それを取出して煮て食つた、又谷將軍の奥さんが草を採つて餅を拵へて兵隊に食はしたといふやうな慘狀てあつたが、その內に官軍の援兵が來て、內外相應じて終に戰に勝つたのてある。人が善い事をしかけると丁度熊本籠城みたやうになつて來るものて、正義を守つて行かうとすると錢は無くなる。人は惡く言ふ、「弱つたナー」といふことになつて、そこて大抵の人が頭を下げて「惡い方に附いて行かうかナー」といふ氣分となる、そこがいかぬので、人が一旦善い事を決した以上は如何なる困難に遭遇してもその正しきを蔑らぬ、貫き通すといふことてなければならぬ。それが精進といふことてある、正しき精神を決めたら後から〳〵援兵を送つて、遂に正義の勝利に期せしめなければならない。

第四には「一心」と申して、心を一つにして一生懸命やつて行くといふことにならなければならぬ、雨滴の石を穿つが如く、一心凝れば岩をば通すといふことになるから、正しい思ひ詰めた事を狼狽へぬやうに、餘りいろ〳〵の事を聞いて「さうかナ〳〵」といふやうにグラ〳〵してはいかぬ、自分の決めた正しい精神を、終始一貫といつて貫き通すといふことてなければ、偉い者にはなれないのてある。そこてこ

の頃のやうに色々面倒な事が起つても周章へないやうに、心を貫いて行く一心といふものが無ければならぬ。鹽原多助が一心多助と言はれたやうなもので彼は捨子であるけれども、その栃木縣の百姓彌兵衛の所に拾はれた捨兒が、どうしても江戸に出て一つ端の者にならうといふ一心で、思ひを籠めて僅か十六歳か十七歳の青年が、馬と別れを告げて江戸に出て八百屋となり、後に炭屋を開いて終に立派な金持となり、社會事業をやつて大勢の貧乏人を助けたといふことであるが、その一心多助といふ者は即ち一心を以て貫き通したから、あれだけの者が出來たのである。東京の神田に松屋といふ呉服屋がある。いとう松坂屋ではないが、神田の松屋といふ店の先祖はやはり百姓の子供で、十八歳の時に田舍の馬丁に雇はれて居つた所が、飢饉で自分の奉公して居る所を追拂はれてしまひ、家に歸つても食ふ物もない、困つてしまつてどうしやうかと思つて雪隱に入つて腕を組んで考へて居つた、今の雪隱と違つて壁などはない、蓆の破れたのが少しばかり前に下つて居つて、紙で拭く代りに藁しべの切つた奴が箱の中に置いてある、そこで腕を組んでぢつとして考へ込んで居ると、蓆がカサ〳〵ッといふ、何だと思つて眼を開けて見ると、一羽の雀が蓆の破れて居る間から這入つて來たので、カサ〳〵ッと音がした、こつちは默つては居るけれども、何だか人の氣配がするものであるから、雀は驚いてパッと立つて行つてしまつた。又暫くするとカサ〳〵ッとやつて來る、サウ雪隱に長く這入つては居るまい、モウ出たらうと思つてやつて來ると、未だぢーつと考へ込んで居る、「オヤ、未だ居やがつた」といふのでパッと逃げる、斯くして三度やつて來て、到頭一本の藁しべを咥へて行つた、ヒョッと見るとその藁しべに籾米が一粒くつ附いて居る、そこで彼が手を打つて、「ハハー何故に雀が來たのかと思つたら、あの藁しべに附いて居る籾米を食ふ爲めに來たのか、あんな小さい雀でさへも、飢饉で食ふ物がなければ雪隱の内までやつて來て、籾米を拾つて彼の生活を繋いで居る、人間ともあらう者が困り果て、雪隱で手を組んでどうしやうかといふやうな事は、雀に對しても申入ることぢや」といふので、大決心を以て江戸に出て、それから丹精をして立派な呉服屋になつたといふ事であります。一心凝れば岩をも透すであつて、何事も成らぬ事はない、それを佛樣が教へられた。

モウ一つは「念善」といつて、善い事を忘れぬやうにセイといふことである、忘れぬやうにといふのは、後から幾ら善い事が來ても、前の善い事もやはり忘れぬやうにセイといふことぢや、栗の實を拾ふならばちやんと袋に底があつて、拾つた栗が溜まるやうにして行かなければ、底の無い袋の内に栗を拾つて入れても、拾つても〳〵溜らぬといふのでは駄目ぢや。今新しい文明が來たとかナンとか言つて、デモクラヘモクラ言うと、忠義や孝行は古い、そんなものは捨てゝしまへといつて、一つ覺える爲めに一つ忘れる——一つ忘れる位ならば宜いけれども、一つ覺えたが爲めに十も忘れるといふことになつては駄目ぢや、一錢銅貨を一つ拾うた爲めに、金貨も銀貨もみな捨てゝしまふといふのは、薄馬鹿といふものぢや。日本には金貨銀貨のやうな貴いものが澤山あるのに、近頃新しがりの馬鹿者が、銅貨を一つ拾つて前の金貨を皆な捨てゝしまつて、拾うても拾

うても未だ溜らぬといふやうな、馬鹿な事をやつて居るのである、話にならぬ人か多い。左樣なことはいかぬから、華を拾うてもちやんと一つ〳〵絲を以てこれを通して、花環として頸に懸けるやうに、一切の善い事を忘れぬやうに、次から次に溜めて行かなければならぬ、善を積み德を重ねて、益〻立派な人となり、立派な文明を造れよといふことを敎へられた。であるから諸君が善い事を覺えたならば忘れぬやうにして、更に新しいものを加へて行くといふやうにしなければならない。

モウ一つは「智慧」といふことであるが、これは前に申す通り善惡を鑑別けるといふことであつて、門番の如しと佛は說いて居る、番兵が劍を持つて門の所に立つて居る、怪しい奴が來る、「貴樣は何者だ」「俺は泥棒だ」「俺は敵の探偵だ」「敵や泥棒は這入ることはならぬ、這入れば突殺すぞ」といつて逐ひ拂ふ、「お前は何ぢや」「私は斯ういふ用事で、此處の御主人に御馳走を上げやうと思つて持つて參りました」「嘘ぢやないか」「嘘ぢやありませぬ、この通り御馳走を持つて居ます」「よし、それぢや通れ」といふやうに、一々門の番兵は敵は敵、泥棒は泥棒と、這入つて來る者の敵味方を鑑別けなければならぬ。この頃のやうに色々の思想がやつて來る時には殊に能く吟味して「お前は敵か味方か、デモクラヘモクラ言ふのは怪しいぞ、一つ裸にして檢査してやれ……宜い加減な事を言へば突殺すぞ」といふやうにやらなければならぬ。それを碌々調べもしないで「あゝ宜し〳〵通れ〳〵」と言つたり、門番が居睡りして居つては、泥棒も這入れば乞食も這入る、さういふやうになつては駄目だといふことをお釋迦樣が說いて居る、智慧とは門番の如きものである、所が今の日本人は、この智慧が居睡りを始めて門番が高鼾で寢て居つて、詰らぬ者がドン〳〵這入つて來居るのであるから、そこを愼しまなければならぬといふことになる。

佛敎といふものは斯ういふ面白い事が說いてあるものだ、これは薄い那先經といふお經にある話をしたのであるが、それが七千餘卷といつて、立派なお經が山ほどあるのである。諸君も次第にその敎の意味合を聞いて宗敎の信仰を固め、さうして前に言ふ通り自分に取つても本當の幸福を味ひ、國家の禍ひをも除いて行くやうに、諸君が正しき信仰に來るといふことは善い事であらうと思ふ、その意味に於て簡單に佛敎の大要を申上げたのであります。（了）

本多日生猊下講演
教育勅語と思想問題
統一臨時號既刊
三六版紙數百頁
一部金貳拾錢
郵稅金貳錢
百部以上貳割引、五十部以上壹割引。
施本用は御相談の上特別の扱とします。

思想問題

遠慮なき皇道大本教の批判

記者

又大本言靈學によれば、父系を「ち〻」「と〻」「た」と云ひ、母系を「おつか」とか「かゝさま」とか云ふが如く、「た」の言靈は陽系、「か」の言靈は陰系を意味するのみならず、高天原の「た」の一音は陰陽兩系の對照を意味するので、「た」「か」二音の「靈返し」は「た」の一音となると云ふ事だ(講話七九)。苦策の結果に生じたる靈返しを此處に利用するなどは結構な話だ、果して然らば「あかさたなはまやらわ」の孰れの音にても同樣の靈返しして、例令ば鷹でも梔でも玉でも鱈でも皆一樣に「た」の一音となるべき筈である。又兩手を拍てば一方よりは「た」の音を發し、他方よりは「か」の聲を發し、二聲集りて「た」の一聲に統一さるゝなどゝ(講話七九)驚くべき事である、實際果して左手より「か」の聲を發するや否や、これは誠に他愛もない事である。又人類發生の根元地を蒲生郡と云ふに至つては益〻奇である、これは和三郎先生の「大正維新の眞相」の一〇三頁にあるが、醸造郡と云ふのが本當なそうだ。人類醸成の意味と思ふが、若し間違ひましたら御免を頂戴したい、併し人類發生の地を言靈學によりて研究すれば、こんな苦しい思ひをせずとも、他に連絡研究を有する、相摸にしては如何であるか。凡そ人靈を吹きこむには「さがみにかみて吹き拾つること」が大切であるので、相摸は二神對誓生成の地であると云ふ方が解し易くもあり、巧みでもある樣に思ふが果してどうか、(因に曰く天祖と素尊との「うけひ」は高天原で、其の高天原は元の相摸に屬し、今は甲斐に屬する富士北口の吉田村附近であると云ふ科學を根據とする考證もある世の中だ、果して然らば兩神「うけひ」の場所を「さがみ」と云ふ方が餘程上等の樣に思はるゝが、果して如何なものであらうか、和三郎先生の御說を伺つて見たい位だ)。又「た」と「ち」を父系とするとの說であるがこれは吾輩も別に異論ないが、上つ方では母君を「おたあさま」と仰せられ、父君を「おもうさま」と仰せらるゝのは如何なる言靈學であるか、言靈學は賤民のみの學問ではあるまい、既に天皇學と迄和三郎初め(大正維新の二〇八)大本宣傳者の明言する以上は。

凡そ此の如く臆斷に臆斷を加へ、連想に連想を累ねて迷路に入るは誠に罪のない話であるが、此間に恐るべき聯想を生じ、だいそれた迷想すら起すのである。大本言靈學は要するに正學でないのみならず、學とするの價値なき「故事附け學」である。試に問はん何故に言に靈があるか、何故に言の靈のみが何より大切であるか、名は實の賓で、名ありて後に實あるものではない、若しこれありとせば贋物でなければ牽强附會の說である。事實ありて後之を表する言語があるのである、此第二次系のものを第一次系なりと主張するが如きは、迷想でなければ强辯である、「キリスト」を神息統止と譯すると同時に、神息は狹霧の「キリ」で水火(ぴ)(元靈元子)を意味し、統は「スベル」の「ス」で即ち主人であると云ふのも一奥である、加之豊雲野の言靈も「キリスト」なりと云ふに至つては彌〻以て奇絕怪絕である、「キリ」も雲も同系のものである(講話一二九)。「トヨ」は多數の意義、「ヌ」は主の約語、「スト」は主人の義で、つまり「すべる

ひと」とても解釋するであらう、一寸戯謔の言を弄すれば、豐雲野は單數の「キリスト」にあらずして、復數でなければならぬ、即ち多數の基督の事であると主張せざるを得ぬと思ふ、然らざれば豐の字が響かぬ。

滑稽ながら今少しく大本言靈學の神秘を發かんに前にも述べたる如く我等人類が一度睡眠狀態に入れば、一切の言靈を「す」に捲き收めて「すや〳〵」と休止すると云ふは（講話四〇）大本の主張である、而もこれは完全なる空無、若くは完全なる靜寂にあらずして、睡眠の「さなか」と雖も神秘的潛在活動が行はれつゝあると云ふ事である。言靈の根源大本たる「す」の字は「すべらき」の「す」にも通じ、「すや〳〵」の「す」にも通じ、鶯、烏、雀の「す」にも通ずと云ふに至つては、誠に自由自在である（講話二〇二）。從つて巢にも通ずるは無論であらう、更に一轉すれば素膚の「す」、味噌を摺るの「す」、財產をするの「す」にも通はぬとも限らぬ、中々便利に出來て居るのが大本言靈學である。

天の御中主神の言靈が面白い、

「あ」は五十音の頭字で五十音總てを代表する、「め」は芽であり、萠（もえ）の靈返してある、「の」は接續詞（たまにはこんな平凡なのもある）、「みなか」は「まなか」の轉（これも平凡）、「ぬし」は「のしるし」の壓搾したもので、全大宇宙の活動の契機の何れにあるかを示す言靈で、一切萬象の萠出の眞中の標示と云ふ意味である、從つて此大神は◉を以て表示され、これを以て全大宇宙と同一の名稱即ち高天原と稱して、全大宇宙を代表せしめるのである、「やまと」の國を中心とする日本は「やまと」と云ふが如くであると云ふ事である。然も此理より推し、丹波の綾部は全宇宙の中心點となり、泥の海から一生懸命に二柱の大神が一所になつて、吹きかためて出來たのは綾部であると云ふ事だ。（講話五四、宇宙創造に關する予の批判參照）

ところで此の二柱の神を產靈の神といふは、第一に結合して固成し創造する事で、「系を結ぶ」「氷を結ぶ」といふも同樣、握飯を「むすび」と云ふは創造の意味であると云ふ事だ（講話六〇）。又第二には、產靈とは化育生長の事だそうで、言靈學によると米を蒸すと云ふは化育の事である、苔生すと云ふは生長の事である。最後に產靈は創造の完成と云ふ事であると云ふのである。結局實を結ぶとか「むすこ」「むすめ」とかの產靈であるから、創造の完成は行きつまりの意味にあらずして、息子も娘も更に新たなる創造化育成長を司どる如き鹽梅であると云ふ事である（講話六一）。

產靈が生長化育の事である位の事は、こんな故事附をせずとも說明なしに何人も信じて居るので、必ずしも其の來歷を說かずとも宜しからうと思ふ。若しも何處迄も大本流に言靈を振り廻さうとするならば、「むす」は動詞でこれを名詞とすれば「むし」である、茶椀蒸などは其の一例である、果して然らば虫類の如きも地中にあり、日光に蒸されて化成する爲めこれを虫と云ふ、「せむし」は背骨が蒸されて柔かになつて曲つたとも云へよう、田虫は田の樣に畔を以て界として居る虫であるとも云へよう、「さむし」とは早虫の意味で、虫が春の初めに地上に出たる時寒さを感ずるので、これを想像して寒しと云ふのであるとも云へよう、餘りしつこいが「まむし」が蛇身の本源であり、蛇及龍の先祖であるといふ事は「まむし」の名に照しても明白であるともいへよう、日本では銅よりも鐵の方が先きに發見せられたる爲め、金屬の本として眞金といふが如く、蝮も又眞虫と云ふのであるともいへやう。如此故事附術を逞ふすると、善惡の分別も又不分明となるのである、「よし」と云ふも、「あし」と云ふも、實は大差がないのであるなんと吾輩の方が言靈學の大家らしく見えるではないか、尠くとも吾輩の言靈學の方が穩健で、然も

適確であると吾輩は信ずる。

尙大本言靈學の妙處として、更に左の如く進展するのは一笑に値する滑稽事である、即ち「を」と「め」の言靈がそれである、誠に以て迷怪極まるもので、又妙快極まるものである。大本言靈學によれば「を」は突出の意味なり、或は長く伸びたる意味なり、魚の尾も獸の尾も皆然りである、又外界に伸びて活動するから玉の緒といひ、心情外に顯はるゝ故に緒外れる(恐)、緒轟(驚)、緒冷へる(惚)と云ふ事になると云ふ事だ(講話九三)。何と云ふ重寶な事か、果して然らば牛の角も象の鼻も矢張り「を」の親族でなければならぬ、「ピリケン」の頭等も外に突出して大に活動する故、矢張り「を」と云はねばならぬ事となりはせまいか。「め」に至つては特に甚だしい、(講話八〇)。女を「め」と云ふは、中に徴候を含むの意味で即ち芽である、吾人の眼を「め」と云ふのも、婦人の生殖器に似て中に兆を含むからであるとは大笑である。

此の如き猥褻な事は御免を蒙り度いものである。皇道大本の出口家が代々女の世繼であると云ふ神諭も、内の主機者が女でなければならぬと云ふのも、兆をふくむの意味であらうか、そう云へば昔より「狐下し」とか「口よせ」とか云ふものは、主として兆をふくむ女の方が多い樣だ。「ミロク」の神樣の大本言靈も不可解の一つで、吾輩凡俗の計り知られぬ珍妙なものであるが、六六六の大神(伊邪那美命)の御言葉に、何時まで斯した泥の世界の暗い住居を致して居つても、何一つの樂も味もなし、何の效能もなし澤山の眷族もあることなり、何とか致して立派な天地を造り上げ、萬の眷族の樂しく暮す樣に致したいのが我が大望であるが、其方樣は我片腕となりて天地を立別け、美しき地上の世界を造る御心はありませぬかと(講話一〇六)伊邪那美の命の仰せられたといふので、其の神樣(伊邪那岐)をも矢張り「ミロク」と讀みはせぬかと思はるゝ樣にしてあるのだ。是れ

などは確かに曲者である、六六六の上の六(即ち天の六)から一を取り、これを下の六(即ち地の六)に加へて、五六七となし同じくこれを「ミロク」と云ふが如きは確かに曲者と外考へられぬ(講話七三)、岐神と美神の間をそんなにばかさずに說明してもよさそうなものだ、そこで美神の此の御言葉に對し、岐神は女房役となりて云々仰せられたとしてあるが、どうしても男體の岐神を女房役にし、女體の美神を主人役になさねば承知せぬので、古事記を故意に書き變へても(そうでなければ根底が破れるのだ、もしも故意でないとすれば粗陋極まるので、其の所說の價値は皆無となる)そうせなければ直子が女體男靈で、純子も同樣で、王仁三郎が男體女靈でなければならぬと云ふ事が證據立たなくなるのだ、況して前に述べた美神の述懷の出處などを明白にしたならば、彌々以て大事であるが、これには慚くとも神啓て古事記などにはない處であると云ふ御託宣を要する。

此の「ミロク」の言靈は大體には說明してないのであるが、六六六を「ミロク」と讀むのは明かに「三六八」といふ事であらうが、餘りに馬鹿々々しいので斷言を猶豫する次第である。乍去これを佛說の彌勒菩薩に結びつけ、明白に彌勒と云ふのは彌々自由自在の妙力を發揮したものである、而も佛樣の彌勒は遠き未來世に出顯すべき菩薩で、大本の如く宇宙創造の佛ではないではないか、こんな事は大本言靈の立場から見て一向平氣であるのは、言靈學の權威維持上少々困つた話であるが、如斯構成せざれば大本は立たぬのである。豐雲野命の場合も殆ど甲乙なき位の苦心で、王仁三郎と連絡をつけて居るので、是等の點に對しても輕觸を要するのである。豐雲野が霧の主で神息統止即ち基督と同じく、肉體となりては王仁三郎となり、又此の王仁三郎氏は月光菩薩で(月光菩薩と王仁三郎氏を連結するには言靈學の難しと

する處なる故佛典の佛滅盡經を引き、これを證せんが爲め年齢其の他種々の牽强附會を敢てせるは滑稽である、（講話一〇三）王仁三郎に憑る神は月天子で坤の金神で、月讀の尊で、素盞男の尊であるので、今は現に生ける肉體を以て地上丹波の綾部に再臨して、王仁三郎と名乘つて居るのであるが、（講話一三〇）これに對し艮の金神は國常立尊で、國常立尊は「ヨハネ」となり、直子となつたのである。そこで直子は「ミロク」の大神（此處では天照皇太神となつて居る）の命により三千世界の建替の爲め、神世開祖出口家が顯れたと說き、「ヨルダン」の河を和知川となし、これを「イスズ」と讀ませて居るなどは隨分苦心したものである、それのみならず「イズラエル」の言靈を葦原日妻即ち天照皇太神に附會する等も妙案である。（講話一三八）

併し上手の手から水の漏る譬諭の如く、「ヨハネ」即ち直子が王仁三郎即ち「キリスト」を指し、我は其の屐を捉るにも足らずと云ふが如き滑稽をも演出するのである。而して王仁三郎が彌々「ミロク」の大神樣即ち伊邪那岐の命として顯はるゝは、年齢五十六年七ヶ月の時である（講話一三九）などゝ云ふのは誠に噴飯の至りである、それのみならず勝手に云はせて置けば彌々潛越の限りを盡すので、王仁三郎氏の偉大を表せんが爲め國常立尊は永久に地の位に屬すべき神である、月光菩薩は天の經綸より隕り降り、やがて再び「ミクロ」の大神として世界に照臨し給ふと雖も、聖書の明記する如く「大權の水極に坐して」（聖書には大權の右に坐してとあり）臣下の長官として臨み給ふに過ぎないのである、然しながら本來地に屬する國常立に優ること萬々であると迄云はせて居るのである。（講話一三九）

右の外大本言靈の眞價を表せんが爲め二三の實例を掲ぐれば、古事記にある沼河比賣と大國主の關係を敍し、言靈によりて其の送答の歌を解釋する樣子は如何にも珍妙である。（講話一九八）

比賣の歌に「女にしあれば吾が心浦なす鳥ぞ今こそは千鳥にあらめ後は和鳥に在らんを」とあるは女の事故、今は胸さはぎ心も亂るゝ思であるが、後には心も和ぎ仰に從ふてあらうと云ふ意味であるのに大本言靈では彌々戰が初まつたら、日本軍も千鳥足のひよろ〳〵の悲慘なる有樣となるであらうが、やがて神皇が御出になるといふ事に說いてあるのだ。そうして其の後に「あやにな戀來れ」とあるを、綾部に來れと言靈は解くのである、それから和鳥の講釋に就て故事附を要する事となり、「な」は神である「とり」は言靈では「す」と云ふので「うぐひす」「ほとゝぎす」「すゞめ」等により明である、（鳥ではないが「きりぎりす」「すゞむし」なども神樣から見れば鳥と見えるのか）從つて和鳥は神と皇との結合であるとの解釋である。「あやにな」の「な」字も神の事で、綾部の天神地祇の事だそうな、併し「などり」の「な」が神で鳥は皇であるなどは、如何にも拙劣な言靈學である。

最後に最も滑稽なる實例の一を掲げんに、天理教のおみき婆さんの筆先にまだ分らぬ謎があるが、大本言靈學は明に之を翻譯し得るとの事だ、乃ち其の本文は、

さとさと、たをとたをと、へうさまざま、このはなしあいづたてあひてたならば、なににつけてもみなこのとほり、一れつみな思按たのむぞ。

とあるが大本の解釋によれば、

里々、打伏す（戰爭により）憑依物（副守護神）樣々大本の出現、對決の上統一したならば、如何なる宗教も風靡し一列みな思按たのむ。

と云ふので其の意味は、所々に戰爭起り國々は內亂に苦しむの時、いよ〳〵人類が四足の憑靈に左右せられて居る事を實證する教が擯ぜる、此の教が餘り早く盛に擯ぜる所から各宗各教の嫉視を受け、次に

立合試驗が盛になるが、終に此の新しい大本の大傘下に統一され、各宗みな先走りてあつたといふ事の合點が行くのである（批判二五四）。なんと都合のよい大本流の解釋ではないか、これを試みに日蓮狂に解釋させたならどうなるであらうか、試に吾輩の言靈學により之を代譯すれば、

佐渡々々、貴とたふと、世の中の取り沙汰、樣々なれど、佐渡示現の敎、相約して世間に宣布せば人生萬事是によりて證せらるべし、一同の熟考を望むぞかし。

の意味であるが、尙ほ每字に附けてこれを論ずれば、

「さとさと」（佐渡佐渡）「たをと〳〵」（貴ふと貴ふと）「へうさささま」（世評樣々）「このはなし」（佐渡示現の敎）「あいづたてあひ」（合圖立てあひ）「てたならば」（出顯せば）「なににつけても」（人生萬事）「みなこのとほり」（如斯立證せらるべし）「一れつ皆思按たのむぞ」一同の熟考を求む。

なんと巧妙なものではないか、以上述る處は大本言靈學の概要である、何人か其の杜撰にして厚顏に而も惡辣なるに驚かざる者があらうか。吾輩は眞面目に如此滑稽事を演ずるものありとは信ずる事が出來ぬ、もし眞に眞面目ならば誠に憫むべき事である然るにも不拘無用の言舌を費して、これを翻弄するの態度をとりたるは、自分ながら耻入る次第であるが、大本の徒の餘りのづう〳〵しさに一寸翻弄したくなつたのである、何に致せ言靈濫用の結果、自ら萬事不謹愼の解釋を試み、これが爲め堅實なる思想を失ひ、動もすれば驚くべき思想の惡化を看るに至らん事を恐れるのである。

若し此の大本言靈學をして其の根據を失ふに至らしめたならば、綾部の神諭なるものは全然其の權威を失ひ、其の中心人物に附したる金箔は全然剝脫し大本敎其の物の價値も殆んど認むべからざる程度となり、人心の動搖を防ぎつゝ堅實なる思想の妨害を除き得るであらう。吾輩はごまかし言靈學を惡むと同時に、一日も其の存在を許さゞる制裁を望むのである、しかのみならず綾部神都の裏面には、だいそれた思想のさざしを含むので、他の人の觀察如何に關せず其の宣傳の禁止を望むのである。假令其の說く所無害なるにもせよ、如此輕浮なる判斷法を國民に敎ゆるのみでも、恕し難き次第であると吾輩は信ずる。

予は此章の終に臨み更に一言せんとす、予が大本言靈を論ずるや、總てを奪ふて毫も與へざるの態度をとれり、是れ必ずしも大本の神啓を非認し、言靈所示の結果を議せんとするに非ず、其の說明の餘りに荒唐無稽にして、其の論旨の人心を註惑する事多きを信ずればなり。予は必ずしも直子及純子が何人の再生にして、如何なる神の權化なるやを知らず、又王仁三郎の如何なる人格を有し、如何なる神の託宣を受けて、如何なる事業をなさんとするものなるやを知らず、又必ずしも彼等を論議し且つこれを痛罵せん事を欲するものにもあらず、然れども大本者流の餘りに放縱專肆にして、累を國民の思想に及ぼす事決して尠からざるを憶ひ、彼等が誠しやかに論ずる處は虛構にあらざれば妄想に屬し、欺瞞にあらざれば迷信に屬し、一もこれを信ずるの價値なきを示さんとするに過ぎず、而も予は彼等の叙事の餘りに傍若無人なるを奇とし、彼等を翻弄するの興味を覺え、聊か紳士の態度を失せるの嫌なきにあらざる言辭を弄せることあり、幸に讀者の是を諒せられん事を望むのである。而して予の決して彼等を恕する事能はざるは、我國の古史を汚し、我國民の道德觀念を變ぜんとし、動もすれば累を崇高なる御國體にも及ぼさんとするの言說は、主として言靈の惡用に基く一種の變態心理作用より生ずる者なるを信ずるに由る、是れ亦讀者の幸に是を諒せられん事を望む。

教義

日蓮聖人教義綱要（第五十回）

井村日咸

第十二章　總結

第一節　學解と實行

以上三大秘法の一々に就いてお噺を致したが、此三大秘法は三と分れて居るが、此三は永久に別々にあるべきものではない、我等の信仰が增進して本門の戒法が眞實に受持せられて、我等の日常の動作が、標準たる本門の本尊の思召と一致する樣に爲つたならば、我身と本尊とは一つに爲るべきである、此場合には三大秘法は三つでは無くして一つに爲つて仕舞ふのである、故に日蓮聖人は三大秘法の事を一大事の秘法と仰せられた事もある。

教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にて相傳し日蓮が肉團の胸中に秘して隱し持てり。（南條抄、縮遺二〇六九）

天台傳教は粗釋し給へども之を弘め殘せる一大事の秘法を此國に初て之を弘む、日蓮豈其人に非ずや。（富木抄、縮遺、七〇二）

の兩書の如きはそれである、我身夫れ自身の信念即ち實行と本尊とが結付いて仕舞ふ樣に爲つたならば我身の外に本尊は無い事になる、此場合には我身の全體が本尊の全體である、斯る意味に於て左の御遺文がある。

末法に入つて法華經を持つ男女のすがたより外には寶塔無き也、若然らば貴賤上下をえらばず南無妙法蓮華經と唱ふる者は、我身寶塔我身又多寶如來也、妙法蓮華經より外に寶塔無き也、乃至然れば阿佛房さながら寶塔、寶塔さながら阿佛房、此より外の才覺無益也、聞信戒定進捨慚の七寶を以てかざりたる寶塔也。（阿佛房書縮遺八二五）

の御文である、我々の信仰が本尊と一致した時のことである、此文に『聞信戒定進捨慚の七寶を以てかざりたる寶塔也』の意味を能く味はねばならぬ、今の增上慢の日蓮主義者は御題目さへ唱へれば、其儘直ちに寶塔抔と言ふが、玆に言ふ聞信戒定等の七寶は實行を言ふたのであつて、實行の伴はない口先計りの信仰では駄目である、實行の結果に依つて顯はれた德行が光を放つて本尊の實體と一致して行くのでなければならぬ、此點は日蓮主義者の大に戒慎し警戒して行かねばならぬ點である、一體日蓮主義者の通弊はあまりに口舌の上に走つて實行の之に伴はぬ事である、理論よりも實行でなければならぬ、百論は一行に如かずである、今日迄日蓮主義が濟世利物の上に充分の力を發揮し得なかつた事は正しく其實際部面の活動に力が入つて居らなかつた結果であろうと思ふ、前來各章に亘つてお噺を致した日蓮聖人の三大秘法も此を實行に移して自身の所有と爲なければ何にもならぬ、幾ら日蓮主義を研究しても他の

實を數ふるのであつては折角の骨折も徒勞に歸して仕舞ふ事であります、今迄私がお喋致した事は日蓮主義の學解に屬すべき事柄であつて、學解は實行の前提と爲るべきものである、實行は其學解に導かれて發する本質である、故に如何なる場合でも其本質たる信仰の實際を忘却してはならない、學解は信仰の意識を闡明にして誤解なからしむることに於ては必要なものであるけれども、其學解に囚はれ、研究に沒頭して實行に移つらねば、其研究は要するに無意義なものである、日蓮主義を實際問題に移して實行し、如何なる問題に觸れても、適當なる信解を得て誤らざる樣に進んで行かねばならぬ、其處に行くには淳善なる信仰と不斷の努力と相俟つて進んで行くのであつて、其境界は言語道斷心行所滅の處である、到底筆舌の及ぶ處ではない、實踐躬行の結果、不言不語の間に體得せらるべきである、今祖訓一二を引いて其の意義を明かに致して置かふと思ふ。十八圓滿抄に、

> 總じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給へ、智者學匠の身と爲りても地獄に墮ちて何の詮かあるべきや、所詮時々念々に南無妙法蓮華經と唱ふべし。（縮遺二〇〇九）

と、文中『智者學匠の身と爲りても地獄に墮ちて何の詮かあるべき』とは、實に身に泌みて覺へて置かねばならぬとてある、徒に法門を談じ信仰を語つても、其實際に於て信行之に伴はずしては遂に成佛思も寄らざることである、蟬噪蛙鳴の徒の大に誠心を要すべき點であろう、『所詮時々念々に南無妙法蓮華經と唱ふべし』とは其實行を忘るべからざることを教訓せられたので、但口先許の唱題では無い、口先許の唱題は蟬噪蛙鳴と何等擇ぶ處は無い、眞實の信仰は如何なる方面に對しても流露して行く眞情の發現であらねばならぬ、玆に至らねば眞の日蓮主義の體得者とは言はれぬのである。三三藏祈雨抄には、

> すりはむどくは三箇年に十四字を暗にせざりしかども佛に成りぬ、提婆は六萬藏を暗にして無間に墮ちぬ、是偏に末代の今の世を表する也、敢て人の上と思食すべからず。（縮遺一二六〇）

と、すりはむどくとは須梨槃特尊者の事で釋尊の御弟子の中には一番愚鈍と言はれた人である、守口攝意身莫犯如是行者得度世の十四文字の偈を暗誦するに三箇年もかゝつたと云ふ樣な鈍な人であつたけれども、佛を信ずるの念强く、其身口意三業を正しく持して居つたが故に、法華經の會座に於ては普許の唱題は蟬噪蛙鳴と何等擇ぶ處は無い、眞實の信仰は如何なる方面に對しても流露して行く眞情の發現であらねばならぬ、玆に至らねば眞の日蓮主義の體得者とは言はれぬのである。三三藏祈雨抄には、

> すりはむどくは三箇年に十四字を暗にせざりしかども佛に成りぬ、提婆は六萬藏を暗にして無間に墮ちぬ、是偏に末代の今の世を表する也、敢て人の上と思食すべからず。（縮遺一二六〇）

と、すりはむどくとは須梨槃特尊者の事で釋尊の御弟子の中には一番愚鈍と言はれた人である、守口攝意身莫犯如是行者得度世の十四文字の偈を暗誦するに三箇年もかゝつたと云ふ樣な鈍な人であつたけれども、佛を信ずるの念强く、其身口意三業を正しく持して居つたが故に、法華經の會座に於ては普明如來の記別を蒙つた、法華經に周陀沙伽陀と云ふのは槃特尊者の事である。提婆達多は釋尊と從兄弟であり、聰明な質で六萬法藏を暗じた樣な人であつたが、佛と名聲を爭ふて、阿闍世王を誑かして殺父殺母の二逆罪を犯さしめ、自身は佛弟子を殺し佛身より血を出し、和合僧を破りて遂に五逆罪を犯すに至り墮獄したのであるが、如何に聰明にして經典の奥義に通ずればとて、道に背き理に違ふならば惡道に墮ちねばならぬ、要は道に叶ふか否かが問題である、道に外づれて居るならば百千の辯口は遂に無益である。御文に『是偏に末代の今の世を表する也敢て人の上と思し食すべからず』と御誡めに相成つたことは、末代の我等良ともすると、上慢を生じて正道を逃するの嫌あれば大に注意戒愼せねばならぬ、提婆が墮獄は人の身の上の事でない、我身の事とし

て反省する處あらねばならぬ、吳々も其誤に陷らぬ樣努ねばならぬ。一念三千抄に、

百千合せたる藥も口にのまざれば病癒ず、藏に寶を持てども開くことを知らずしてかつへ、懷に藥を持てども飲ん事を知らずして死するが如し。

（縮遺二一二）

と、如何に本佛世尊の大慈悲に依り摶糅和合せられたる大良藥なりとも、唯之を床の間に飾りて置いたのでは何の益に立たない、之を飲んで始めて毒の病皆愈ゆるのである、佛の教は我等が煩惱の熱を冷し苦惱を除くの用ありとも、我等衆生其教法に隨順し實行する處なくんば何の益をも受くることは出來ない、要は其實行如何に存するのである、藏の中に寶物を充滿せりとも、其藏を開くことをせずんば遂に其寶物は益に立たないで餓死するの外致方がなからう、我等は佛性の寶藏を持てりと雖ども、其佛性發現の方法を實行せざれば其佛性は無きに等しきものである、我等は如何に佛性を發現せしむべきかに努力せねばならぬ。次に十八圓滿抄に、

一圓浮提第一の御本尊信じさせ給へあひかまへあひかまへて、信心つよく候うて、三佛の守護をかうむらせ給ふべし、行學の二道をはげみ候べし、行學たへなば佛法あるべからず、我もいたし人をも教化候へ、行學は信心よりをこるべく候。（縮遺九六四）

と、此御文は學解と實行と並び行ぜねばならぬことを御誡め遊ばされたのである、學解なければ正しき信仰を得られぬ、信仰の實際が伴はずば學解は何の益にもならぬことを仰せられたのである、吾等は此御文を座右銘として常に信仰に入らねばならぬ、我等が實行の標準として一圓浮提第一の御本尊を信じさせ給へと御仰せられた、我等は本化の菩薩の指導に依り本佛の大慈大悲に感孚し之に乘托して、其信仰を永久に持續し、本佛の教法に隨順して此が體得することに努めねばならぬ、此が日蓮聖人教義の神髓である、結歸する處である。

廣告

前金切通知せし各位は翌月號發行迄に送金なきときは集金郵便を發送候に付御了承有之度候。

統一發行所

記事

統一閣月報

△八月六日土曜講義○「撰時鈔」木村日保師「日蓮主義綱要」井村日咸師、△七日講演會○「法華經と日本國」小西日喜師「精神生活の基本」木村日保師、△十三日土曜講義○「法華經講義」井村日咸師「個人と國家」小林文學士、△十四日「解脫の境」村岡本量師「日蓮聖人の主張實現」野口日主師、△廿日土曜講義○「色讀の行者」村岡本量師「御遺文講義」木村日保師、△廿一日「無上の歡喜は信仰に在り」木村義明師「實在の佛」村岡本量師、△廿七日土曜講義。「御遺文講義」木村日保師「法華經講義」井村日咸師、△廿八日「行菩薩道」森川泰洲師「日蓮主義信仰の要諦」關田日城師。

各地の思想戰

◎京都教報　七月一日於本山國疇會修行後講演「更賜壽命」有田宏道師、△二日於本山講堂健兒會主催にて保護者大會、萩原、金光、有田、土持各師出演兒童教養に就ての講話後、講談狂言三曲合奏等の餘興、△六日健兒會、土持、今井兩氏童話、△八日於成就院護正婦人會「龍女物語」有田宏道師。於川東本正寺二樂會「精神教化と日蓮主義」今井乾章師「修養の根本義」有田宏道師、△十日於正行院正行婦人會「理想と實際」萩原日道師。於大慈院法王婦人會「婦人の自覺と其功績」土持良達師、△十一日健兒會、山口山田金光出演、△十三日於本山宗祖會修行後講演「國民精神の歸着」金光孝碩師。護正會例會「法蓮鈔續講」萩原部長、△十六日於法光院法光婦人會「思想問題と日蓮主義」金光孝碩師。健兒會、山田三谷本田出演、△十八日於本山講堂大講演會「妙」土持良達師「結合の力」有田宏道師「物質より精神へ」金光孝碩師「造佛墮獄論者を評破す」萩原部長、△二十一日健兒會、土持有田萩原出演、△二十二日元誓願寺渡邊洋行店に對し修養講話「奉公の意義」土持良達師、△二十五日より三十一日迄一週間連續納涼大講演會を本山講堂前大廣場に於て擧行、大天幕の下には數十個の涼み臺を並べ、門前には大提燈に布教部紅綠二流の長旗を押し立て、篝火により一段と人眼を引きたり、「正法に來れ」山口智光師「健全思想とは何ぞや(其一)」有田宏道師「法華經より觀たる佛教(其一)」萩原部長、△二十六日「法華宗の眞價」別所小三郎氏「日蓮主義より觀たる國家觀(其一)」今井乾章師「法華經より觀たる佛教(其二)」萩原部長、△二十七日「日蓮聖人の教義(其一)」大川孝準師「佛教の根本義」土持良達師「法華經より觀たる佛教(其三)」萩原部長、△二十八日「法悅に安住せよ」山田繁次郎氏「精神修養(其一)」

金光孝碩師「法華經より觀たる佛教(其四)」萩原部長、△二十九日「信徒としての我(其一)」別所小三郎氏「健全思想とは何ぞや(其二)」有田宏道師、△三十日「信徒としての我(其二)」別所小三郎氏「日蓮上人の教義(其二)」大川孝準師「日蓮主義に來れ」土持良達師、△三十一日「日蓮主義より觀たる國家觀」今井乾章師「精神修養(其二)」金光孝碩師「法華經より觀たる佛教(其五)」萩原部長。已上一週間連續納涼講演は何れも平均三百名前後の聽者熱心に參集し、大多數は八月中引き續き聽講する者を見たりき。△二十六日於本山講堂健兒會、原、土持金光出演、△二十八日於本山開山會修行後講演「法華行者決定の心」土持良達師、△三十日於本山　明治天皇第十周年御忌報恩會修行後講演「國恩觀念に就て」萩原部長。△八月一日於本山國疇會修行後講演「感應」大川孝準師。健兒會、林、山田今井有田各氏出演、△五日於本山境內納涼講演會「信徒の眼より觀たる現代宗教」別所小三郎氏「健全思想とは何ぞや(其三)」有田宏道師「法華經より觀たる佛教(其六)」萩原部長、元誓願寺渡邊洋行店員へ講話「らしくの說」土持良達師、△八日於川東本正寺二樂會「社會改造と日蓮主義」金光布教師「日蓮主義としての衞生」宮部二等軍醫正「法華經より觀たる婦人觀」萩原部長、△十日於本山庭前納涼講演「日蓮主義より觀たる國家觀(其三)」今井乾章師「精神修養(其三)」金光孝碩師「法華經より觀たる佛教(其七)」萩原部長、△十六日健兒會、山田大川林有田各氏出演、△十九日大施餓鬼會修行後講演「功德無量」今井乾章氏、△二十日本山庭前納涼講演「親鸞上人と日蓮上人」別所小三郎氏「健全思想とは何ぞや(其四)」有田宏道師「法華經より觀たる佛教(其九)」萩原部長、△二十一日健兒會、橋、林、今井土持各師出演、△二十三日夏期特別大講演會、健兒會々員男女生四十名は隊伍を調へ會旗を先頭に入場君が代二唱宗歌の合唱

聽者何れも寂として聲なし、入場者約三百五十名「開會の辭」金光布教師「思想問題大觀」野澤少將、△二十四日於本正寺二樂會主催思想問題大講演會、聽衆滿堂「開會の辭」金光會長「時代精神の矯正」野澤少將、△二十五日於本山廣庭納涼講演「日蓮聖人の教義（其三）」大川孝準師「日蓮主義より觀たる教化」土持良達師「法華經より觀たる佛教（其十）」萩原部長、△二十六日健兒會、今井、橋、林、金光各氏童話、△二十八日開山會修行後講演「如說修行の意義」土持良達師、△三十日於本山廣庭納涼講演最後の公開「日蓮主義より觀たる國家觀（其四）」今井乾章師「精神修養（其四）」金光孝碩師「日蓮主義より觀たる勞働」萩原部長。

◎名古屋地方　八月九日於楢崎清宅家庭講話、川島兒玉出演、道路宣傳三百餘名、△十日道路宣傳、川島兒玉小松出演五百名、△十一日、十二日道路宣傳、△十四日少年少女會、永井橋本寺島川島童話、△十五日道路宣傳、△十六日於淺野宅家庭講話「嘉子の譬」川島常照「法華經の二大教義」國友僧正、△十七日於常德寺孟蘭盆會嚴修後講話、長谷川兒玉兩師出演。於相澤宅家庭講話「嘉子の譬」川島常照「法華經の二大教義」國友僧正、△十八、十九、二十日道路宣傳兒玉師出演、△廿一日於常德寺少年少女會、童話栗田寺島「日蓮聖人傳一」川島、△廿八日於常德寺少年少女會、童話永井寺島「日蓮聖人傳二」川島、△九月一日於不退庵花木青年會の爲に講演三百餘名「精神修養に就て」國友文學士、△八日於常德寺妙教婦人會講演百餘名「信仰の力」國友文學士。

◎濱名通信　七月九日於鷲津劇場講演會、加藤少將滿井文學士出演九百餘名、尙同地方の開拓、製絲工場等の講演は頗る有望に付增田智靜師大に努力すと△八月八日より三日間於大正濱海樂園思想問題講習會開催、每日午前八時より十一時、午後二時より四時迄の二回に亘り第一席に「國民思想の態度及批判」野澤少將、第二席「日本の軍備問題に就て」加藤少將、第三席「飛鳥朝時代の世相を思ふ」滿井文學士、第四席「人生問題と佛教」國友文學士。三日間を通じて高明正大なる識見を以て堂々論明せられ、各聽講者屋內九十七度の高暑を忘れ、百餘名の會員一人として扇を使ふ者もなく、嚴然として謹聽せり、△八日夜於新居町住吉座公開講演會、聽衆千五百餘名同地未曾有の盛況なりき。

◎千葉通信　七月廿九日於土氣善勝寺第五教區各寺院聯合の　明治天皇第十週年大法要並講演會開催、渡邊布教師大導師の下に各寺住職廿名列席嚴修さる、當日の主なる參拜者は石塚町長、土井校長並教員、齋藤驛長其他在鄕軍人町會議員及一般信徒等「祭文」石塚町長「開會の辭」米倉管事「國の大事と人の心」溝口會旭師「明治天皇御盛德」渡邊布教師、△八月廿七日、於山武郡丘山村小學校軍人分會青年團聯合講演「開會の辭」清宮村長「時世の思潮に鑑みて奮起せよ」加瀨倭武少將「文化の標準」野口權大僧正。三百餘名、又夜は丹尾清宮村長宅に於て家庭講話「人生の目的」成島支部長「四恩調節の修養及信」野口權大僧正「家庭の修養」加瀨少將、△廿八日於片貝小學校山武卅二ヶ町村選拔中堅青年團員講演「現代思想問題に就て」加瀨少將「三王發揚の修養」野口權大僧正、△廿九日より五日間、同支部と各教區寺院聯合の下に講習會開催、同日は特に於片貝公會堂思想問題講演「開會の辭」土屋眞容師「日蓮主義の特長」笹川日堂師「富」加瀨少將「赤化露領と改造文明の標的」野口權大僧正、△卅日午前八時日蓮主義講習會「開會並御遺文捧讀」成島支部長「本尊議」野口權大僧正「法華經の通觀」笹川僧正「立正安國論」武田文學士、科外「日蓮上人女性觀」成島支部長、△九月二日午前にて講習を終り、午後一時より山武郡漁業組合殉難者の追悼會を海岸に於て、野口權大僧正大導師の下に、第七教區寺院僧侶

檀信徒相會して執行す。期間中講師の熱心と講習員の精勵と相待つて、近來になき感化を與へたり、尙本講演會に際し、幹事戸村啓藏、高柳定吉等の諸氏は數日寢食を忘れて、法の爲に大努力をせられたり。

◎作州教信　八月十二日於上之町弘通所婦人會「日蓮上人一代記」能仁一十師、△十九日於本蓮寺盂蘭盆會嚴修後「盂蘭盆御書を拜讀して」能仁一十師、△廿二日於和氣村藤田修養會「幸福とは何ぞや」能仁一十師、△廿三日於久成寺講演會「開會の辭」吉塚通榮師「佛は慈悲なり」能仁一十師、△廿四日於山田村公會堂「民力涵養の徹底的意味」能仁一十師、△廿六日より三日間久米郡々役所主催にて思想問題講習會開催、中川日史師、岡山縣社會課長等出演。

◎山口通信　七月十二日於切山秋林寺「佛教と我等」山岡俊泰師、△十五日於久保村誓教寺佛教婦人會開會式「佛教より見たる婦人」赤松佛教團長「近代女性と佛教」山岡俊泰師、△十七日於溫田日蓮宗教會所「是好良藥」、△廿日德山德教婦人會「近代女流の要求と其批判」、△廿一日より三日間下松工業學校修養會「文藝推移を論じて日蓮主義に及ぶ」、△廿九日於溫田教會所　明治天皇十周年紀念法要並講演「明治大帝と國民思想」、同日夜富岡町松本宅「先帝の盛德と我等の自覺」、△卅日德山町高等女學校「明治大帝の盛德」、△八月十二日於秋林寺例月講演「迷宮の使者」以上何れも山岡俊泰師出演さる。

◎北海道報　七月十七日國友僧正は先日來札幌各所に於ての御巡教に聊かの疲勞もなく江別驛御着、法華寺住職檀信徒は玄題旗を押立て出迎ふ。午後二時講演開催「本因本果」田久保日城師「感激と信仰」國友僧正、聽衆百餘名、△八月十六日於法華寺施餓鬼法要後講演「過を改むるに憚る勿れ」田久保日城師、午後七時より石狩河沿岸に於て河施餓鬼執行、田久保師導師となり有緣無緣の溺歿者の供養をなす。因に北海の新開地に播かれし法の種は漸次蕾固なる根ざしを固め、札幌區顯本寺には毎月一日に月並說教、同十二日には統一團支部の講演、江別町法華寺には毎十三日月並講演、及毎第三日曜には地明會の例會等例れも田久保日城師出演す。

◎北日本布教行　北海道札幌區に新に顯本寺と稱する精舍を創立出願中の處、本年六月十一日附認可せられたので、創立事務の爲に渡道する事となり、途次南三ヶ所に日蓮主義を說いた。（國友記）△七月十一日夜、盛岡市杜陵館に於て、聽衆三百名「立正安國」木村布教師、「人生々活と宗教の信仰」國友日斌、「閉會の辭」中村市助役△同十三日、札幌區顯本寺に於て、「實在の佛」國友日斌△同十四日、同所に於て寺號公稱奉恩謝德法要後講演。參詣者滿堂。「新寺創立と將來の覺悟」國友日斌△同日、札幌高等女學校に於て、五百名、「國民道德の妙諦」國友日斌△同日夜、時計臺公會堂に於て公開講演、聽衆滿堂「開會の辭」阿由葉前道會議員、「所感」高野辯護士、「健國の理想」田久保日城、「人生と信仰」國友日斌、△十五日、北海道巡査教習所、「勞働問題と佛教」國友日斌△十七日、江別法華寺、「感激と信仰」國友日斌、△同日、札幌區中野氏宅、「佛陀の涅槃」國友日斌△十八日、青森市大林區署、「勞働問題と佛教」國友日斌、△同日秋田木材會社青森工場、「感激精神」國友日斌、△十九日、青森郵便局、「修養の根本義」國友日斌、△二十日、山形縣米澤在中部村小學校に於て、村教育會青年會聯合講演、「時局と國民の覺醒」國友日斌、

◎北陸通信　九月二日越前今庄善勝寺、盛會、石井管事の前講後「信心の妙諦」國友文學士△三日、南居妙正寺、「悉有佛性の教」國友僧正△四日、福井妙經寺、豪雨なりしも聽衆百五十名、「人性に關する東西の學說」國友文學士△五日、芦原溫泉いろは旅館、「自力と他力」國友文學士。昨夏開教後、一ヶ年の發達の蹟顯著なり、信徒の爲に大曼荼羅を謹寫し授與す、將來正義の一精舍を得べき曙光ほの見ゆ△六日、金澤本長寺、窪田山主の開會の辭に次て「人性の現れと本質と」國友文學士。

監督布教師　山根日東僧正著

日蓮主義百話

三五版三百七十頁
天金艶々ローズ頒美本
定價金壹圓五拾錢
送料金六錢

本書は著者が嘗て雜誌『統一』紙上に投稿連載せし『機微譚語』の累積一百顆を改題せしもの今茲に聖誕七百年報恩の爲に之を上梓し初版は著者有縁の道俗に法施したり今回之を再版に附し實價を以て頒賣す布教教材として修養資料として趣味津々たるもの僧も俗も競ふて購讀あれ賣切れぬ内に。

發賣所　東京市淺草區北清島町十四番地
統一閣
振替東京一三九番

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
○聖訓要義　各卷壹部金貳圓貳拾錢
○開目抄詳解　上卷一部金貳圓八拾錢
○聖語錄　金貳圓八拾錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四拾錢　送料一部金拾八錢
○大藏經要義　一部金參圓八拾錢十一卷迄既刊　送料一部金十八錢今年前金送料不要
○法華經要文　並製金參拾錢　上製金五拾錢　送料一部金貳錢
○先帝の盛德と國民の反省　一部金拾錢郵稅金貳錢

以上購讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺内
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金參拾錢　送料一錢
一ヶ年	金參圓參拾錢　送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大正十年九月廿七日印刷納本
大正十年十月一日發行（第三百二十一號）

不許複製

編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍
發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　統一閣　振替東京五一〇七二番
編輯所　名古屋市中區新榮町四丁目十五番地常德寺内　統一編輯所

目次

思想問題……本多日生
本經祖書要文講義……本多日生
生活問題と思想問題……小林一郎
遠慮なき皇道大本教の批判……記者
日蓮聖人教義綱要……井村日威
記事報道十數件

第廿五年十一月號